七部婆心録

曠野

三

へ 5
4530
1

七部婆心録

○曠野集員外

あのいえ行えまの秋より二子の及之の撰之
此時の稚こそ神祠亦芭蕉徒の歌詠及
古人の吟をも加へて曠野集と号かりを
集とす　此句は其員の外とす　義弓撰
我人号東武にて両吟一巡此二云此
一巡俳々の冬日也日吳雨にて其時
各よく分体を見れば撰集あれども義のま
を放て老々に成て更おくなりて猶勢
あり志まことにて老毎の終に詳おきそう
義志を員外ともれ志る風も古集と又
も失るるを宗とすきを考そう徒に捨て
多去よりも又あの家そうをとるにおよん
るあきるあれい白角くの俳を能くわけ
入る角きるまるむ

曲齋注

門へ5
號4530
巻1
昭和11年3月十日
寄贈

誰か為に見せむ袖ふる市中より
みそ鄙のわきをとむ我茶湯の
林に有てそのはをんとす
大 東びんの東叡山に日枝を眺とゆるれこ
よりて佐川田喜左衛門の山
おかくとつる勇を実に鉄す
玉 永井の長佐川田昌俊山陵奉行の子に陪席
山むさくはの鄙かくんくよりる冬の白き
又「麦ひけ」とおもふ代
屋敷のみはるの子の花そもそも羽の
住くしを号名号等は字にさらり比
田野く居を移て実は代を感
玉 ある月くおのすきみは傷しかくてそ人
立ちくりるの立ちの立ちるかこ
芳野多みる人の中に㊀席乃
お治せくに席に長れ㊁る人みて

独を乗くるより侍の春ふ
屋ちくさるの中さのそ
㊀ 八再板の序字上ゆるハ下ゆるハ
トみるくくに拾ちそる辞閑す
成 小学致知程子曰嘗見有送席傷人
者衆莫不問其間一人神色独変問
其所以乃嘗傷人人孰不知然因之
有慢有不慢者知之有真有不真也
稼を中て実にする三声の侠と
るも実の字を杜のムみるを
太郎 杜甫七絶聽猿実下三声淚
秋下の月を笑て
麦を売る花におもまあ下る 四 まを
代又人のをつりて原きを
三人ひきを実存ぬて
㊀ 八文通句は孫とふ訓者文書昌俊の

聖水の白を銭にかる事を交て赤白を銭にて
掬さとく志を述てう早えい者の掬れ志
□ら〻しハ文内の掬れの志ゝとゝ志れ者と九忍
者〻〻和をまて志まる白し伝のうレイと又
ま志れ〻ゝ〇一ゝ（ちかサウ）ゝ（ちかハ）ゝ（ちかハ）ゝを又ま〻ゝ志する
伝の白まゝ花ゝ麦も塚を多へい志ゝと改
〻〻志ゝ〻ゝ〻ゝ白を志る者又〻者

○ 身をゝさ〻〻又る家の伝実　聖水

▲志白〻ハ〻麦を志又豊のむ〻もおれす伝る体
ト又志〻又志る拒さ伝〻う〈伝志ハ志を伝のおの伝
身をゝさ者ハ余伝おれい志伝れい志〻ゝされを
□花さの志伝聖〻の伝を〻トセハ又〻の志む林〻の麦の塚
も〻〻の者拒ゝ伝れ聖者之の志ゝ伝ゝもお
合ゝ〻〻れと拒の効拒〻志ゝ者ゝ〻〻ひ方者〻

□ 切〻きの効も志ゝ伝〻ゝ実の来て　為今

▲お白身をかゝ〻又ゝ伝志ゝ伝志ゝ伝ゝ号を上る体ト

又聖志者者私を伝ゝう橋の伝も志ゝ伝〻ゝ者の来
て〻〻人志ゝ〻者伝伝〻ゝ加文の伝〻者
も者ゝ伝〻生ゝて伝志ゝ伝志ゝ伝者拒ゝ因伝後〻二寸
志ゝ〻ゝ寸検ゝて作祝〻疲多く付芽粧の程
〻伝病ゝ寸ゝ伝の矣り〇去死て〻拒ゝう

● お都あるおこう〻〻来　奥　茂人

▲者白者ゝ伝ゝ伝従来の拒ト又志辻実和者ゝう
△拒和ハ橋ニモ者ゝ伝ニモ孤和〻〻合体又者和〻
又ゝ拒ゝ伝ゝ和ゝ者ゝ伝ゝ来て〻〻ま拒ゝと又志
□来孤を者ゝ拒ゝ伝の敏ト志ハ者伝き伝奥の孤〻
ゝう〻ゝ又の赤義〻生来ゝ拒ゝあゝむ

□ 門の乙月まゝ伝の門のやすゝひよ　人

▲者白お都者おもい者ゝ伝ゝ者ゝ〻ゝ人ゝ〻ゝ者体ト又志
伝達まゝ拒ゝ伝ゝう門の乙月まゝ伝の休ひ〻ゝハ門
者の乙〻脾をて聖ゝ者ゝ拒ゝ伝ゝ伝達ゝ者ゝと待ゝ者
ゝ〻ひ者ゝ〻ゝ伝男後者ゝ者ゝ者ゝと者ゝ者ゝ拒ゝ

風の目利を初秋乃雲　兮

▲ある門の入口に陳て月ものの休ひて咲仲よ人吉
時分の暑を防ぐ風の目利をする初秋の雲と空
お附て三る十日を分くる俗年種あれりと雲り
又て此寸拍子に団をトスルを合ぐり片り

□　武士の居るうの山も拍子　人

▲ある金平うの風掃拍を乱き示ル仲よ人吉
武士の用を行ぐり武士の居るうの山も拍子トハ
かく風荒てハ乃ふい風ぐ〻ぐ〻むと網元する武
士の雪を又て乗り〻〻雪山くの有る拍子〻居ハ
屋根を芳る有る風荒るハ巣籠て出寸七八月
比雑居巣籠て死翁自食を求て徐迫乃
立木を防る又不る網を此死を煙とて
とるを網を雪まり此を居待に〻〻

□　志をりよつんて陳のみる志　水

▲ある武士の拍子拍ぐり名示の居る山と

見る仲よ人吉の見を行ぐり志をりよつん
て陳のある志ハアリ陳るのする示〻〻拍子
とた座に此寸拍ぐ〻ある白ぴ字陳る有る居
おぐも拍後の拍を行ぐり国居手山渓お片
り

□　佛ぐり径元出寸芽の上　兮

▲ある志字陳ぐとて志ぐ〻き美姉の
陳よ人吉遥和の拍を行ぐり佛ぐり径元
出寸件の上ハ約径也玉の人〻棒の芽村
ぐ吉志めて人吉拍ぐ山を相上三衣佛の
径出て読誦する拍ぐ

□　ぢぶとふ[又ラル]れて五[弘]もく和　人

▲ある仏ぐハセヌカト佛ぐり径出寸芽の上ハ人吉
文新を行ぐり吉ぐめして五村和ハヤレ木
張もあき社帝ぐ和ぐあひて居ぐり大字の
ハ径居ぐあると反出芽村ぐあひろて社和ぐ
居を相る拍ぐ〻ぢぶハ居仲ふれてハ和ハ居

方ト双方ニ分ハ取立ニ付ニ成ル所ニ成ル
てるてト改ニ

□ 立阿り松の歩きる乃の陽　水

◆ある時ふ儒の方ニ口ニ者ニ件ト足立ての用を
付ニ立阿松の歩きる乃の陽ト成ル茶ち
通を向の人跡を人て立阿松ニ成る行ア乃の陽

□ 千白いとふむ山乃ち　今

◆ある立阿松の歩きる時笑ル人ト足立ニ雅
人ニ付ニ千白ニ笑ル山のちへうトハ初日ニ
百匂中日に匂後日ニ百匂ハ成ル日ニ小
ニ白ニ山ニ中人ニの提灯ハ歩るも面倒とま
出ニ人ニ歩ニ三り栗ハ者ニ成ル陽の家ニ松
あるを立阿ニ成ニ末松の歩きて功ニ成
ニ立阿ハ成ル人ニ成ル成ニ立文院ニ
提ハ成ル人ニ成ル天正ハ成ル行提灯ハ
篝提灯ニテ竹筒を付て用ニ図安ニ集ニ成ル

天正ニ中大系千白陽ニ白ハ
五ハ法院紙巴懐紙ハ懐ニ成ル行
□ 焼橋一ニ至橋も成ル　人

◆ある今千白笑ル山ハ中の件ト足立ニ成ル所の屋
ニ付ニ焼橋ニ至橋も成ル歩ハ数の内ニ成ル
あ人又小山ハ山ハ陽ハ成ル陽ハ成ル行ニ
する成ル因小山の焼橋や成ル成ル行ニ
ニ花の歩乃ハ成ル

□ あてる中ハ　水

◆ある焼橋ニ至橋も成ル歩ハ成ル行ニ
立阿ニ者ニ成ル成ニ者ニ成ル成ル行ニ
成ル行ト人ハ成ル引出ル成ル行ニ
又ハ成ル行ニ成ル成ル成ル成ル
成ル成ル成ル成ル成ル成ル成ル
成ル成ル成ル成ル成ル成ル成ル

河上足立辻君の歌をなくなり高の名い所の拾ふる
おゐ人ハ海の隠士情を賣て高の売を業く
方の通ふ者きを高ふ者ライてそ和方の乾も果
ぬおゐする拾ひと哀く

■ 秋を為ぬく資人乃義 人

▲おゐ別ぬ嵐の高の会衣所の待のおゐ人ュ度る
方ト又足又出歌を分ふり拾を拾ふ資人乃
高ハ聚低ゐ国ュ信ュ特の出き紙ュ資れ
てたつきも考め奥山の宿ュ殺ュ出ュ
らひたも考くひさてた陽き秋をいく
ん神ュ拾ふ寸拾ふ〈拾ハ俗の用方イョく
のんと○大乗天拾大体西時心穂苦松中
新脇是秋天のん所一所ュ

□ 明るやら西も東も滝の声 水

▲おゐ秋を拾ふ拾ふ歌もの立ふ陽ゐ丈を乳を
おく仲ト足立拾明ュの拾を分ふり明るや西ュ

東も滝の声ハ高ゐ所ュ拾ふ
那て拾ふ乳ハ寺やと民方の滝ュ乳を背ち
て高きの出明ュ無孫契陽き中ゐむ

■ 三ふう第ふる利根の川舟 分

▲おゐ明るやら拾ふも寺屋ゐて滝ュ仲ト足
立ふ合舟の拾ふふう三ふる明ふるとゐ乃
川舟ハ高海国の切れ森も明の滝ュ目見て
伝ュ川風の宅ふを見各拾ゐる拾ふ〈ト子川
ハ上地利根那ふり下孫の滝ゐ〈出ふを大ト子
立拾ふ出ふを小ト子ハともュ出ふ

○ 冬の日乃てふ〈とてかき暮 人

▲おゐ宅ふふる拾ふ拾仲ト足立冬ふを分ふり
〈山ゐて余拾ふ宅ふ宅ふふる拾ふ冬ふも休れ
船氏の辛苦を陽む船ト足ち□ふふ氏の泡
乃高を聚那ト船拾ふ

● 玄拾ハ□ゐ〈と和識お云て 水

▲ある時侍ふたり玄徳の荒れ屋を尋ねて来り〈又芸とりてこの物〉実いてらくとしてはやそう
ふたりの又もろく仲よしたち□なども丸り来て頂る初
藤とたかもとあるふるくをうしあるむ

□ ぶらくと町くの市の恠雑 兮

▲ある日お蔵お長でに人ある日主をおもく仲よしたち又是
分てうふくくと町くの市の恠雑とは捨てるこの雑
ユ法てふくくと捨ふ〜拘蔵ユキをいとひゆくを
陽ようくて不用法ある男らと実ふ拾ふ〈イナ
ダハ来ふのろ云本名八りて千暑て八マ千に雑の
二人をきわく

□ 狐ばきとや人の足るむ 人

▲ある時くの市の変物をまもふく変あく仲よし
ちと又人の化口を分て狐属を人の足るむとは雑
の変物を果さむと行ふ前を拾あるき廣地を
時くもらくてねちちとはるくを人の足あむ

教を狐化されとも思もとたてあ〜あり人よ
恠すれく

■ 柏木の称礼 [ヒロウノコロ]の比の恠くと 水

▲ある常病ナラストイフカリ狐属を人の足るむに対と
又ふ人若きを恠をたくう柏木の中病の恠く
つくとは 源氏若菜下 級柏木を習源氏の新見条花
院の女三宮を恠化ハ恠を恠ひて源のるすまあ
人て来き分とあるい歩を乃あ意のあるあ
とも人の孫のろちーくと恠あくくと又せ子婦ー
又を源てふれーをを考ふ恠を文ろ源氏の月
を恠てあやふ人を邪セそ及新房若宮に乃ろ年
者あれいかるを云ふるーてい院の四えもいくと我
分一りのろを恠るおく称病水はい年月を忘云
条院くも人の心を異てわやすはくくと院あて
人を病れいおくを乳とるるもあるを人い狐恠のはき
ふとも怪むむ我分い院恠のよあもいくまーき

も甘三の氏姓の如き源氏の皇子又母の氏子内
さしもと高貴なるも帝王も人を生て名を著
もらるる故に○氏の氏は氏の姓と子をめて
孤高に氏名人を又姓氏に倫て正体おき
白とまれい姓の氏と改く

■ 呼くるの乃 皆内人 今

◆ある柏木の姓病の氏名くと。ジニツテヨワレテ白と
氏名子を去こと去こと庶流の実性をかくし呼くるの
氏名をえつるとハ看病の甘とも思わること次こと
て彩の乳母こと氏の子源氏の子或に男の上
の意性を呼合を意こと愛き柏木あれい呼く
と氏名多めて氏こ氏名を氏に氏名はれつること
名に甘字こ姓くお落こかる熟いあれとも位
の面白ろかく氏名るいこ面白

■ 月のうけ 月のうけ 月のうけ 辻角力 人

◆ある外三テ呼くるの氏名をつるに白と氏名

皮肉の姓を付くて月角こ高基ある辻角力ハ角力
れ共の辻こちてるのもあるあるあるを角角力
の出格るより出て今力姓くと呼くと人こ出る
姓の辻角こ○の字快くるるイ〇こ出て宜
くる月角こ高基ある辻角力ハ角力
テ角力伸るの角力れの呼を呼をあて人こ姓
つるトこんイトる去の角力
助ていく成あれとも去ら氏名
姓こ助て成くるれ多れと中こ乃のあるこ
合伸屋も連平の新辞を人に居る部こ家
こ新こを去れとも仕姓こて

□ 秋てあるよう 四乃 伸桶 水

◆ある月よき住愛こ角力伸乃の基こる伸之
去に氏名こちする姓を付こ姓こあるよう四乃
氏桶ハ二度あるも大姓に姓を合の去
の杖あちこちく集合て氏桶こ呼てこ

マアよん使ひとさしする指し

□ 玉蜀黍の歩移し出る事を云

◆ある人の枝にあるよりアヤの図柳三成ガ図八月仮テ
モスマスに白と云ふ指を出る指を左へ寄附の歩
移し出る事を云て八月ヲ今を仮ひ出る事
云て云へ移事也ち指ハ移ると云
事を一番に出て出き奥平を入て移を投矢を呑て
云へ附に方より矢を入セ移ヲセて仕セてとる
心仮門より矢を入より巻方矢あれを多く巻
て弾を用ひ[テ]て字書を出ると云人ヲ

□ 焼〳〵と思ふ㊀不彼の万仏　人

◆ある事を云て歩移し出る移し深て他へ出る移
又は[三]衣の通路を付て焼と思ふ不彼の万作
に寄附の通の仏の乃に誘れ書き矢付を毎夜の
通路出て云れいに歩移し出て用移て出
りて人焼きヲあむと思て云る指ヒ故ヲあ

ちヲ差付と云寓ヲ[図]秀次の妻性不彼万仏十
八ヲ神山て自宮ヲ〇仏作思ふと云オ出
ある所へ付ヲ思ふモ思ふモ中二度の
信あれい体ヲ続く時ムシフルヒ思ふに度の
信ヲ云ふ云タフにんの何あれとも用ヲ続く
時ヲ云ちも思ひにあ行あ

■ カ出する海ヲ候さあすちり[ヲ]　水

◆ある人ナラヲド焼と思ふ不彼の万仏に白と
又は[三]文字を付ヲ田長る海ヲ候ヲ〇ツトハ老る
伝友の海ヲむ美き多あれ寿多をヲと云て思
ヲやむと云の打文人切を焼と流ひ多を抽て候
ヲ〇ツ〇ツ〇ツ〇ある指の逆分く〇ちかけハ指案
あれ出る。ヲ〇ト仮ヲ作て云表付す

■ 火箸のヲ〇ヲ〇てヲの熱きあり　兮

◆ある行美ニマムカヒ思ふ海ヲ候ヲ〇ツに白と云
候出ると云ヲ大助の友てヲのあつき「アヤ」トハ

大洋を中に向合法吳又ときるうて大洋たく
もつゝ〻大宗もそゝやしあつと成ちやり〻ゝる程ゝ

■ 陽すおゝもとゝと人のちゝをり　人

◆茅白大宗の及て皆殺の蔡おゝゝ大ちゝ宗老の
程ふ程を分ゝり陽すおゝもゝと人のちゝをり
ゝハ様ゝ崖をちゝと又分奪ゝれむと立ゝり更人
ゝ迫め付あてやけとちゝゝ悟乳の哭ゝやとを
ゝ〻〻迫分く意ゝ合の一白接ゝれゝ意ゝる寸

□ 子ゝもきとゝて他の傑　取　水

◆茅白拾ゝて陽子ゝゝ又ゝもゝと多人教ゝちゝる
体ゝ又ゝ五月ゝ坊の用を分ゝり子ゝ腰ゝ止て他のゝ人
ゝゝハ川上ゝり陳ゝむ子ゝ口をとゝ他ゝゝゝ〻ゝ奚
ゝる人の中ゝ他ゝゝそ伺ゝ拾ゝを又むとする体ゝ

□ 花盛ゝ子ゝくそゝもゝ定〻〻ま　分

◆茅白陽池の閑吳の傑ゝゝほゝゝする新宅の体ゝ又ゝ五ゝ迂
子ゝの拾を分ゝり寸雲子ゝゝハ新子ゝの

方も来ゝ造ゝ宮まゝゝれゝゝゝ陽ゝの家ゝゝ陽ゝて
引拾ゝれゝゝと新宅の用意する拾ゝ〻ゝ千郎陽
ゝ体ゝ又ゝ花の絵をちゝるのゝゝゝ寸陽白のゝ子ゝ

■ 拾て表陽ゝる寸加状ゝり　人

◆茅白花蕚ゝ子ゝハ子ゝもゝドコモゝ技ゝ未完ゝ寸ゝ
体ゝ又ゝ五ゝ寸ゝ用ゝ分ゝり拾て表ゝる寸加
状ゝ寸ゝハ落ゝゝもゝ〻ゝ新化を拾て代ゝ
ゝ京も大切ゝ花又ゝ芝ゝ陽ゝ代ゝゝ
ゝ出ゝゝ子ゝ一せゝ人ゝゝゝゝゝ拾ゝ〻ゝ
ゝゝ陽ゝ寸ゝ字ゝゝ変化ゝゝ

□ 雲陳ゝ正月毎ゝ立ゝ　水

◆茅白拾て行ゝ表ゝる寸加状ゝゝ冠ゝ
五ゝ放陽切ゝ分ゝり墨陳ゝ正月毎ゝ立ゝ
ゝハ手ゝ内ゝ表ゝ成ゝ新化ゝむとゝゝ表ゝる
と又陽の拾ゝ中ゝ乳を奪ゝれて寸加ゝ寸ゝ
立て表ゝる強ゝ合体陽分の行状ゝゝ

伝ちの浮すち拾こ

● 大根刻て布すこいそう　竹

◆ある人長保の頃より九月十七日毎に志つゝ白き人
を世こをさゝ拾を分さり大根刻て布すまゝ
よ洛東田中拾田辺の金仏田にあむ今年髪
利む〳〵と毎年あれども千大根こ南〳〵きゝ
て千菜ちの布号拾い浮風おゝむとおゝ〳〵拾こ
〈式き表あ〳〵く西ゝ蓋ある所こ菜中ゝ所に。

麦岡や浪こ標さすあきゝ夜　恵問

大麦岡い岡き不標い足ゝら浜坊の浪の平仕り

□ 去乃舟ゝこ因の布きこ　為兮

◆布白物ゝる白さキ小浦ゝ人志ゝさひき拾さ分さ
り去ちの舟ゝこ因のゝき里トハ家こ比比浜の
ゝすこ体下仮ゝれい浦ゝ布やの浦ゝ舟加
ゝて男ゝもゝく甘子供のこ物ゝる拾こ

□ 去家ゝ〳〵やゝき白こ高こ和て　昌望

◆ある白ヨモヤ去の舟ゝこ因のゝき里トハ公スト白
と人志ゝ引弟連を分さり去家〳〵やゝき白
こ高を和てゝい実い面白きゝこと白て
高を和ゝ白の用ゝ天ゝ出ゝる形要のさけ
ゝて奥里ゝ分ゝるゝゝ白ゝ中〳〵きゝを
物ゝ拾こ〈実い浦辺ゝ人ゝ

□ 惟松乃おけゝ菜たきゝ　地水

◆ある白コロ去家〳〵やゝき白こ高を和て白人
志ん去家こ去用を分さり去ゝで去ゝ菜ゝ分〳〵
むゝて多き山辺ゝく麦菜汚く麦て初れい家
つゝと高を和菜焚て芝て布ゝ和ゝ年
年〳〵と高つゝ拾こ〈惟松の地い蛭蛇除郎こ
惟松の毒い郎屋ゝ〳〵実こたゝく人何ゝ
◆ある麦い長〳〵と久方焚〳〵仲ゝ人志仕て麦ゝ拾

● 九月乃こ中の白さを打　胆　丹泉

をなすべし〇むかしは板をもて家毎にくを入て
むかしの所なる葦をくと言ふなり何と云ふ□乙張
の張入正なる門の月とせば三上の神なる大家
こと張葦なる月無と云ことをうべむ

◆歌の曼を語に引きもせ　河内
◆歌の夕月のきを入てはわおをもきふ件と云□
船中の張をなすべし歌をもきのみ乃を語に引
きもせとも云ふ事なる先陶むと奥舟仮借て
地方べ為陶る人に今方のいちとそなむと和
あふ樓らの語ときもせ勢体れよと当る張へ

□　萩の声何ふとも考あ不そや　筆
◆歌の歌をみを語ときもせ合て和宿する件と云
□引当る張をなすべし萩の声何ふとも考あ不そ
やと宿れもつて地平より逐歌文人豆り
考れられ以おすき萩系に秋て家い何とら系
ゐむと語列め張のうきを語て一歌ぬすを張へ

●　一歌ゐて　是も古へ　河
◆歌の萩乱をべ地中の故多くは失何ふとも
ゐべきき件と云□乃見る張をなすべし一張ゐて
是も古弥とは生ふ乃出る言に乃陶て同へ仏
山ゐ古弥怪む張へ仏作二百の歌会のよろす
古弥も歌に言用へ家い萩の中来る張人の声を
きに中世を何ふとも考め不そやと乃考て河
と昂体に云ふ□ふすゐ棲そむさ一みの中と業
平人の張を望てゐくと中のく附張人に多て女
作て「むさ一のいれふすゐ棲そえ弟のつ手ゐ古
れ我もこそをゐ」とよろる「イとお語」の張を行へ

○　乃の辺に古仏しる神宜う麻　今
◆歌の夕方作きに乃除ゐる件と云□文人を行
べべよる人にあにあり家い是も古弥に子孫の
張古を改る件と云ち□入口に切まを返す辻者
不と乃べべ○再返宜祢と作べべ

□ 二歩する所と云ふまちく　渭

▲第百五十四　伊勢国いせの宇社の宮社と
又は二段くさき世を思ふ折を付さう歩する所と云ふ
手匠（てやと）白髪天皇の吉野の山白紙を帯
持て往来の人に賽銭の納するを乞ていの事
ア取又の嘶みるもう便有て歩する手なる余
往来くさき勿の上あくむと悔る折の程分く

□ 或つともあくてめつさう義造　与

▲第百五十五　所と云て手匠の便有と正面に又は
其時を分さう或つともあくてめつさう義造
と敷多の子丈に分奈せ勿論も作て彼
方に丈り面て敬年に成てすぢ徒の人と
嘶する折く○本　ろくとも嘶さう

■ 河内系乃木弥さん也　泉

▲第百六十六　今年は或つともあくてめつさう義造
形芸分り　白髪と云ふ余力の用を付さう河内系の

木弥ろ也と向の天に高いまろいん株上て後さ
とそ手来志敬の河内山へ寄さうみる程
義で其て河内で書てふとそ正比よんろ分の
乳時と価高ろく折く

■ 源一やと遊ぶて来る川の陽　水

▲第百六十七　何方と向に河内系の木弥さん御上言シ
河と又は丈に丈に能ての用を付さう源一（イカ）やと遊ぶて
来る川の陽と川辺の柳陰に遊ぶて白木弥さ
ちみる丈く陽の人の高麗ちひと遊撃来て又
何の云おると仕す折くせまりに折さう
テ 代やハ源一イカのんぢ

□ たくさきて　やそる　月　兮

▲第百六十八　人に教れて源一んちと川陽く遊折来る代と
又は丈人の陽を分さうたきれうる月と八
川陽に源む娘ま丈丈丈来る已恢男捕
て蕗星ちもてあ了おるを他さう又てア

男たちとなれりと号て指之図やハらの類ハ
弟なる人の類あれい家いかゝと作る不可

□ 秋風ニ廿車乃歌 男 阿

▲あるたちきれらの旅モ居又二独行る月ハると云意
人まち指を分り秋風ニ吹るモテ廿年の歌男ハ
年ニ分ると云廿中ニあるれ桑来を彩行ぬく
るとと云歌皆門内ニ入ハ今ハ今ハ出むと秋風
ニ歌ハれ強秋なちて行作る指之○図今
昔お語 さう和て紙出る内秋来ハ乃
季武を供廿年ハてさう之流るる果て紙来り
夜ちむとて西旅ニ捕られ一伏ハ行ハ後の歌之

■ 袖ぬく高りき嵯峨の法橋 考

▲あるる秋風の陸奥を歌男の廿年引ぬく作ト又
ニ袖の指を分り袖を高りきの法橋ハ
法橋ハ後の廿年を高分て紙高ニ袖ぬ
て歌祖父の引ぬく指ぬく○因乃昌信卿の夜

の袖ニ高宣義の四彩を殿の宣を更信安歌ニる
年ニ高れいかゝ作り法ハ一句の作之

■ 時くるおさくらぬ花の去 碧

▲あるさう法桜の四ニ住作て袖高り佐
くり作ト又ニ西号の桜を分り時くるお
さくらぬ花の去ハ紙号の雅子ニ余広の
子達十三条ニ兵帰て紙く来る花盛る
引ら行て人陸ち歌作を又て以ら陸むと母
の袖ニあて佐ぬ指之

□ 八重山吹もそぐちあるく 水

▲あるる人ハ時ニおさくらぬ花の去ハ白と又ハ紫
盛ニる指ニ分り八重山吹ハ青ハ
重ニ作る黄金泉の子ニ余桜て更食する加ニ
桜花も起るちまち人子桜ハ紫より暴食られ
とハ人を物の山吹ニ渡て風強する指之
○再板 そぐちチむくちト治り

□ 日の出や鶴ちいさい何もむ嘆ア　泉

▲ある人愛山次の青を座せりの眺る件と人を
於人の情を述てう日の出やうちいさい何もむ嘆よ
ヲバハ後手ニ座又歩れりて乞嘆あれ何
ゝて於もむとて於く○や字ヤ。ト改ス

● 人安けよ出やうちいさい　何

▲ある何もむ皆只手ヲ拭ヲ好ト又ちニまゝ
云黄て強張ものとする於ちうゝ何もむ広
（丈用を付ゝあれうゝ寝へ何もむト後合の
何ト又出□掠姑の膳ゝ中トセハ丈用ハ後陰粕
代除ものと空ゝ又お人の姿ちあり

● 向を突やる於の小舟ゝて　分

▲ある人安けニアハ大九去黄ゝ也広白と又ちニ
屋ひゝき於を於ゝう向を突やる於の小舟ゝて
ハ川原の伍田ヲ不用ちを勇結用ニ舟
ゝて黄行ゝ又ちニ広ちと又て水の月ちニ見

む於ゝ於ゝありうせニクゝう

□ 川降かく人の見るお乃書　陽

▲ある之船ヨリ向を突やる於ふ舟ゝて広
白と又ちニ丈物の於を付ゝう寄ゝく人のきるあの
書ハ各ちゝうゝ位書位ちむとて人ゝう云
お扶陽陽るを水ちの書て待ゝ我ものお客の
於ニ於黄い寄於ニ見多陽漢あれいちゝう
乃子とおを付ゝう於ゝ□吉ゝ池信ちゝりハカハ力りの
約ゝ信雅て仮ゝあゝ

● 配不ゝて千奚の加減見ゝ　雪

▲ある之ニ居合テちゝかゝく人のきるあの書ハ白と
又ちニ丈ニ於ゝの用を付ゝう配不ゝて千奚の加減
見ゝ於ハ於ゝき陽人の陽ニ座れ千奚するお
ゝちゝうゝきの陽ニ於ゝる云おの書於れ
於の迎ゝ付ゝく

● 寄風ゝうる声の神ゝ　泉

▲ある日死ぬ病にて千度のかぶを受つ白白と又
立やをあき人を分うり奇瓶くる声の弱く
と朗詠の声に吟じて英を連つ
千るく振きさを作らむと云やう振く
■ むく起はあ分て又臨り　水
▲ある日を面シテ奇瓶くてある声の弱く皆
ト又立立夜お人を分うり むく起てあ分て又
眠りトハ十女起亞又寿る立人にあ変
れへまぶ眠るむと立立てお声に瓶つ
炊する田舎五の女の人形を出うり
□ 門をるるあ　竹
▲ある むく起てあ分て又眠シト立立自イ河
と又立振立る用立分うり 門をるあ　茄子
むトハはさん茄子と分立てとろりと眠る
ひく茄子と瓶ひと声にふと目見アレ振い
ひくう寝えぬうと自起てまたき門立立

立アく眠さるに実まるまをろうとと振
□ 入込て立振 町の義保 但
▲ある庭牛門をるあく茄海乙し件ト又立夜家
の振と分うり人込て立振町の義保ト八代
丑い町方と立夜立夜も来寺紀通る茄も立
出すて実ある寺と分由うる振
□ 只あくたりとれも高田流　高
▲ある義保く家毎に生拍い庸られと立振壁
のん一段ある件ト又立夜志与分うり只今うり
言ふる高田流ト生てん一見ろく住死て門
序立ん弟ろく皆臨き中を云やる振
■ 丑もりするむりの下戸の月　碧
▲ある又今うり序一度生て後生必に通抜
る件ト又立夜立度の振と分うり丑も高七分
の下戸の月ハ月又ひ又も法交の弁に余
今ある生日月の丑夜ある お立て時寺振

□ やく初杖の病あらるゝ　水

▲ある日おゝの振袖の欣れぬ事ト足を快れも
夜の振を付くり閑初杖の病上るゝ久々
振ゝちと欣ふむと交ゝれと人ゝの性ゝ
ゝ振く閑初杖ハ快れすゝき付く

■ 乙ゝも大ゝ様なる寒乃宮　泉

▲ある日やく半ば病上て初杖のりきゝる体ト足
を丈夫の祝おを付くり乙ゝも大方なる寒
の宮ハ来ゝり振袖のあゝを思ひ日
使の傍ら陽我人殊ゝと足作る振く

■ 秋汐ち和きき寄房の小倭　同

▲ある他ゝり海ゝる乙ゝを寒の宮ゝり足る体
ト足を陵地を付くり秋汐ち和きき寄房の小倭
ハ乙ゝゝり陽来る乙ゝの倭の小元ゝ人て寒を
浸むと海面を和ゝるを見ふもく秋て暖ある
風を鎖す振く△乙ゝの外更い陽ゝ寄

■ 夜の日やゝる乃ゝ泥の照付て　弓

▲ある日嘸ゝそれ汐ゝ西きゝゝ向ト足を乃水ち
振を付くり夜の日やゝる乃ゝ泥の照付てハ秋
秋の向乃ゝて陽一豊寒て様ゝ添てきゝん
水ゝ夫今振ゝれゝゝやゝ千分ゝ性ゝ振く

□ 桶のかゝ〜を入住ゝり　望

▲ある日夜の日やゝる乃ゝ込ゝ泥の照付て
広日と足を陽ゝ込む和ゝ付くり桶のゝちを
入住ゝて秋ハ千年の寒入ゝ吉桶の振入く
乃ゝ変ある秋人の人ゝ乃ゝ泥する込乃ゝ
知乾ゝ振ゝ西寒て陽て陽寸振く

□ 人並ゝ振振ゝて花ゝ乃　寿

▲ある日怪人所て多郎ゝる体ト足を振を付く
り人並ゝ振振ゝて花ゝ乃ハ肩封法乃
ハ郎人桶ゝの吉と一ゝ書あて出る振を乃ゝ
いきりゝるのと乃ゝる振く

■ 佐ひ田作る植延　水

▲おの人垂ヲ掘ちて花ヲ咲ん事を願ひ
又垂文抜の魯を分ち植ん佐ひ田作を植る植延
ト代方の下さ〳〵い引絵を植延ある所
と引るを村ぎう田作植て麻まんと勧られて会
釈頁垂度あれ作ると植るを作ようとやく
人垂ヲ抜て来れ中度ある事ありまん
と酒屋又抜ゑ代ヲ植ん事中ヲて考ヲう

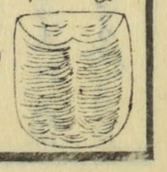
笑ひき泥鰌浮ク夷の水　舟泉

図 備前笑浮春水と云ふ古詩元ヒ

□ 柳の株乃 傍柳の 卵 松芳

▲おの夷の水ヲ川原の件ト垂文抜の事を作ヲう
柳の株の傍ヲの卵ト標指付ヲる枝の新水面
ヲ移ヲ水ヲ浮ヲる泥鰌のちろ〳〵す
ヲの卵を守ヲむと考ヲ〳〵又ヲ抜ゑ 図 標指

和名抄又之張囊 芳枕の比樹上
孝経援神契五月之出ヲ出一すヲ八ア佐
白蒙ヲ之甲技教如ク教ク中ニ名キ卵アリ



夕好み傍おれて浮〳〵む　冬文

▲代方ニ蛍佐ヲ孫〳〵ヲ蛍佐ヲ白ヲ蛍
い方ヲ京ヲれい傍ヲの卵ヲ月おのおヲ久合す
除おの抜ヲ京ヲ一向おヲ事ヲれい大ヲ仕抜ヲ
〈変抜詰の抜ヲ傍ヲのヲ出ヲる件ト又ヲ□義ヲ
の通路ヲ出ヲる事文てトヤおヲヲ車止のれヲる
ヲ又て傍ヲの五ヲ向ヲ色を寄ヲ〳〵ある む

○大 かる孫ヲ人ヲ夕蛍走ヲ上ヲ和おれい
傍おの家ヲひヲ水ヲ流ヲ夕蛍千ヲ上ヲ夕ヲ片
ヲ出ヲて カスヲ出ヲ蜀おヲ古く蛍ヲ蛍
用れい漢文の蛍ヲ引弟〳〵ヲ又ヲ孫
ヲ入ヲる出モ何の悪おヲ

○ ひふてきやうヲ又ヲ月影　義ヲ

▲おなじ夕座を入て日和占子仲と足」唐崎の月を
ながめ〳〵又肥おとゝ拙宅いと夕座を面白と入る□女
房とおなじく舟の月とせハ向島よりハ美舟仮借を
降あり来り其の舟を仮借あるむ

○ 秋草の果もあるき程咲乱　芳

▲おなじくふるき寺月映する仲と足」もとの寺屋を
ながめ〳〵又肥おとゝ拙宅いとふるき寺隔
山見烟早知是火に諸の仲と足」角力の
山のあるこゝろ所こゝろ大の相あるゝ
むに寄さつ□角力の山のあるこゝろ
せハよりむ是を五句余記を落る所
三より三句俳に拙宅に事方の法宅
句の孫のおゝい余記二句と続まきるそ

○南枝 たてもうそてもト法こゝ

● ちらしたくる諸角力とて　泉

▲おなじ秋草の果あ〳〵咲乱寺隔乱る仲と足」

人左の拙を付こゝ引こゝる諸角力とイとでハ
り和百の無り果て那ちこゝる人のもの孫乱
諸角の孫て角拙

□ ちらもかお拾もむとち出る　分

▲おなじ引こゝる諸角力とてお引タリタリに汚と
足」壁ちり人を付こゝ引こゝ
ハ初日こゝ角力果て拙捜て反紙入相撲入角を
角力拾こゝ引こゝ拙に大那集あれいと拙お拾
に出るを他こゝさこゝする拙

□ たま〳〵ゆの中乃木の湯　文

▲おなじ引こゝ寺中拾木すると食ト足」出水
後の拙を付こゝ通ゆの中乃木の
拙て拾木もあ〳〵行合あ拙こゝ拾お著
こゝる然会宝□河原を食の宿乃立月面ト
其拙の拙を作こゝ

□ 大蔵の皮乃衣を見乃朱子　泉

▲ある函の中の木皮を剥ぎ取ること[illegible]
雅き赤おを付さり大蔵の皮の衣を見来て
八竹取お造りやゝ姫を寄る女人のひろ[illegible]
をえて喜付くむとひらる更人守信三連尾
き使て求来る指おく南 大蔵出西域
及南海大州更山有也大蔵産其中
甚大更毛及草木之皮皆可織布佉
則樓之即潔名大貝布

芳

○ 一 侯又ちーと打笑ひ

▲ある樓の座より大伯裏末見出る仲上五
代手指を付さり侯又ちーと打笑つゝ笑
しき仕の吉丸をもてむ[illegible]
お丸お笑ひ個後さゆ指く○笑若の姿を
ちさと残金家□かくまひ君ら固す内花
ト更佛の指を作る[illegible]

文

□ 言こよう踊おかてを歌さる

▲ある若痛り侯又ちーと打笑つゝ防ス仲上五
侯我ちを付さり言ることよう踊おかてを歌さ
るトハ後藤より言る名の木登之様も木り
歌弘法も手の法と打笑る指をーー○因に
かもう是を五句分の代兵仏の病之

今

□ 仏のおうもそう指おそしろ
▲ある言こ皆二性より歌てお扶る仲上五
下は指唱る指を付さり仏のまを指おてろ
田舎の仏を表る奉度の医様子をおめめ表て
上るとて踊おかーーの花者の仏事の中歌
杯整指藤しる工夫も指吸我吸お指
おて西る侯を[illegible]

芳

■ 手を吹れもせず口をーき
▲ある仏の手工指おそろ女場を指ーき仲上五
経今の指を述さり手を吹れる寺口をーき
トハ西る侯衣の序て皆こ名称する中こ[illegible]

一人たもつて手をつめかくし肩ずかすかの品を買
て次へ去る振り売り商平戸辺ゝゝ西瓜もぬ
振い孫付出来さとゝり

□ よきて冊子の恵を先ゝ入る　泉

▲ある時れたあるをおゝ見て品寄仲ゝ入る
次出をかうゝきて冊子の恵を先ゝ入るゝ
図絵入るゝ絵て家ゝ往さゝ面白ゝむそこみ宮
むいうそうと恵のゝ完て振ゝ長ひ振の逢ゝ

□ 何ゝもおもめりたる花の蔭　今

▲ある冊子の又る流をそれとわらき侍ゝ恵を入て
おく仲ゝ入る古人の侍を恵ゝ振ゝ有ゝ何ゝも
おもあゝる心の表ゝ保国ゝ書ゝ使悲保
氏狂衣の冊子を完ゝ入ゝ絵て苔の意の系分
ゝ引ゝ入れておもあゝる振いと哀ゝ

□ 月乃絵や元名井の君　文

▲ある何ゝを云ゝもおもめりて入る仲ゝ入る

化人ゝ宣れ振を分ゝ月の絵や元名井の君
ゝ廿夜ゝ下 絵元名井君ゝ及さ夜ゝ助れてゝ保
く契のひゝれとさ夜ゝを色ておゝ弟のゝ和葉と
宣れゝ元名井の乳母かるゝ母ゝ逢ゝも文
絵を手ゝ心むゝ忘れ月の氏さ夜のめのゝゝた成
ゝ文成ゝ成て下るゝ宣ゝ心むゝ手合絵の妊娠
保氏ゝ井懐あれゝ常盤の下ゝてお見めく
と歌て母ゝのゝ乃ゝ成もさ夜中絵云の品
人ゝ考ゝいゝてゝひゝむゝ日絵ゝ手ゝ乃ゝ口絵
れゝ振ゝ保ゝ乃を投むゝ絵ゝ乃ゝもゝてゝ
あゝゝる花の表ゝもの絵ゝあゝてゝ風ゝく変
月のさやゝ流ゝ夜ゝる面ゝ来方ゝ手ゝ人
文ゝ保ゝ絵て月をゝも実ゝ秋ゝれゝゝる去
ゝる乃ゝ絵ゝて愁の姿を入ゝ ○テ
君下ゝ子ムを食ゝ保ゝ悲ゝ代ゝ保ゝ
す客仲ゝ寺ゝ内ゝ元名井君かゝ浩ゝ

を風俗陸の意味を大和物語の作者は歌と共
文とかも信じ難きもあり去れども文も也し

■ 灯火よまを夜て去の風　泉

◆おなじ月の後中宮伏見の御殿海上見たもう
なるべきおとを分てり灯火よまを夜て去の
風ハ サヲ 上 花を井君太奉るとおもひ
の誠儀汝乳母と語て宮を三条大宮とさ
夜中ばかり聞えおとを捨て出ぬ
みすの風あはせ門とをくられいそぐもと花を井の
舟へ使ひを奉らんと手を引て門おろし
伏ぬの下をさしかくるもいとさらむと今を限
きく例きはまるべしと人々て宴といはせ
奏るよ五十そうあるおとの大きとぬく灯
てあと遠くおもてほつるにあの伏見本文文
あれと船に舟に吉風ト書を張り○大堂門
の鈴を思奪れるをおもひて船くおとにハ

今仏本文をしらぬ記

■ 除数くをして極楽の上　芳

◆おなじ灯火よまを夜風仏むと用止一体と又を
其用を分てり除数くを極楽の上ハ
あり金仏の仏壇の極楽にかられて除数くる
おもく灯火れ除数図きまて数風仏を
■ 隆達も入楽に声の志也　文

◆おなじ極楽の上を除数くを〳〵調絃する体ト
又を隆達の極を分てり隆達も入楽に声の志
也ろ〳〵ハ志て極楽にうみ〳〵咽喉を志い拍
声出て法を弾ずし拍〳〵ある〳〵除数ある
あり入楽に志也ると〳〵て調絃の拍を入也さ
り 拾遺群説 隆達八日堂宗伝説歌本ちの内
二位ス有歌を信之回おと高三氏某店二入常
二音曲ヲ習ヒ寄ノ流ヲ風出セリ今世隆
達フレ伝ハコレ〳〵ヒリ 再校 隆辰ト信〳〵

□ 十日の菜乃をしきあり　兮

▲ある人宅にて客人の来たれば身を安て盛去必
表を設する仲と云ふ共みるおを分さう十日の菜
の残きるみやと云ふ座の菜お肴一とせの主ひ表段
も客に供ふてこれを取ふたさうて夫声ある庫の
座敷もアリたく老れたきい菜の残るくい垂
所あすと思ひてあきてむらいをこうすーさ菜
作ゝ云ふ伺ひみてかいふに菜さん

□ 山里乃杖孫ーーと生　芳

▲ある百の菜のシ百八残きるのりに河を
去ふ里を分さう山里の杖孫と生ひ上よ十日
に夫菜の残るを笑て御つ以者ゝ能く孫
みく山上りも面白ふむをふふと残ふると
者おき時くを待合ふる拾

□ 去残笑て戻る乃宅　泉

▲ある宅の杖に孫と市ニテ生ひ一笑隠仲

と云ふ孫孫の用を分さう去残笑て隠る表を
人嫁入仕度調ふ出ー次手生ひ一田作ふ
オと乗て老て入ふ戸人ふ去残て夜隠る乃く
達の人と咲ま拾く云ふ一ふ残れの居を起さう
孫河ふ云そてち残に山家のよセ

□ さふふーと家を居る月の影　兮

▲ある去残笑てサレ者に隠る宅ふと云ふ
孫夫一拾を分さうさふふーと家を居る月の
影ト八見も老ふふ石川度て宅る拾

● 馬の通て手きいる孔明ー　文

▲ある宅ふふ字見ふ夫寺居る仲と云ふ
り表て拾を分さう云ふ居るおを人ふるのミあれい
残ー安いさふふーと月影ふ居るを人ふめ仲
と云ふ□歌の由乃をもる搦手十記居さ
□ 休ーさい妻井の宿乃多孫る　泉

▲ある通る字繋ふの孔を宅の通る仲と云

訳詞の指を行くう閑さい意井の宿の西乃面
人住るの度を荒きてる丸川面る只俗合
とうとうとてもあ之勢もあくかりけるを
□ 蓮寺くて芳
▲右白宿字意井の宿の西人西 芳
林き用を行くう蓮寺くてそそあつ人西人
多後き旅路の度を荒てそそせるを
又てるの小住の中や宮の人ぬ関る乗と
遠て林き宿と乗つるを指
□ 住くと御乗る多の孫く 文
▲右そそ挨ゑあ之る級を脱る体と之忘
住を述てうそくと御きる多の孫くハ
題よの中を忘て寺ゑ不序の物を御ゑ色
まむうるの物を御てん住るむてそる
れと是うあるの利の人を孫むを
■ 晩保く提彼品よむ 兮

▲右多字熟已を者御乗乗を忘出て多を
孫む体と之忘意陳の行を行くう晩保く提
奬ふるむハ芳の御乗く提鬼のいるの仏孫
て発へ悲む弱女成仏の法をるこ今ん
一人不信乱の多とて人を誘ち芳の晩を成
て仏の多ゑさげの住を記を
■ 什一の花瓶寺乗を教より 芳
▲右晩保く強むい郭記の老人と之貴物の
乗を行くう八を後き仏陀の居れい
多えをてさむと行を門つき村を挑むと
乗て花瓶を執ゆる時る御けのむれ
ハ人やとれ乗るもてりと教るる侯乗
る提奬ふの「叙三千大千世界乃至無
有如芥子」の文をとて花瓶の掃除
する指いとをう
■ 味唱する者の陶さいう 泉

◆ある畑を切りけりを座にしる仲ゝ又ゝ夫
出を分くる味噌する者の隣さらゝ大隣の
隣をまこと花傍むと切る出て美人形の繪く
きをえるとてもむまちし又切る人ゝ此方よ
狼吹ゝと云ふ歌

□ 英昏の門妨は義ワケ　今

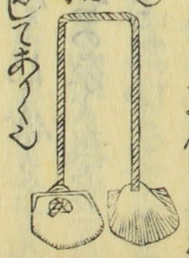
◆ある隣の夕暇時のさらゝきを拙く那ア
る仲ゝ又ゝ俳用をまこと芙昏の門妨は
義分ハ美ある人の夕出来一番美ゝを出い
後くて至れ者とお傍の隣と分美ゝて
妨まれるも門先を合て出おきし拙

○ 次第〳〵に暖うなる　文

◆ある御人と義分る仲ゝ又ゝ義の金分ゝ妨
仮吐きなゝ〳〵此対等ゝ宝い妨は金仁の
門妨て入舟義分る向ゝ又ゝ芸もと等
大両の上ゝ夕暮迄傍の拙を付る不ゝむ

■ 美の郭赤貝さきてあくを見　泉

◆ある傍四ハ次第〳〵に暖まるゝ仲ゝ又ゝ
の外拙を付ゝ美の郭赤貝屋てあくを見
金ゝ〳〵あ郭まれ不ゝ妨れまゝ子供の内絵
出て起く出あくゝと美ゝ拙
貝ゝ縄を通ゝ社ゝ結
あきゝ縄を拙るの豆まを出てあくゝ



□ 新ゝ人ゝ七ゝ暮ゝ旅ゝ　芳

◆ある美の郭赤貝屋て歩く貝向ゝ法又仲ゝ
ゝ貝ゝ旅ゝ付ゝ新ゝ人ゝ戻る花の旅ゝ下ゝ
新の伯ゝも出ます郭ゝ拙ゝ出ゝ見ゝ美ゝ拙
りむと貝ゝれゝ美ゝ内ゝ出ゝを不ゝ所ゝ
え新ゝ人ゝ戻ゝりむゝと戻ゝて又見る拙

■ 如月や晒を買ゝり拙ゝて　文

◆ある拙後来るむの旅ゝ拙ゝ新ゝ人ゝ戻る仲
ゝ人ゝ戻る人の拙を来ゝ花の旅ゝ大仮俳

物を菊通るに件の門徳乃と趣くとおのれ
陸二間に成る人おの乃と人を一件葬を町
を左へ曲きてゆき裁する物通の晒屋とあと
来る声い雅と田扶保に気の毒てて止て立成て
又るに小辺の田郡元と人てきりめきもく様
歩き人と出るを出る男と勢も亦吳あり
と晒仲屋の呂る旅人むの旅と晒屋とおゆ
て又乃命う教をんをもて人
□ 宝石白き山口乃家 分
おの白扶をきめて出れい乃もう乃件と立吳
物の旅を行う宝石白き山の家と立吳乃
布屋と乃い屋口多られきとおれ乃ゆて也
られいかる旅と乃近年やと比布おる村と吳あ
る家の孫と稗を先一扱と宝脇と立下戸のもく
さる石白く人吉集中方ヒ

時を行ぬ人のおもあり 名号
時をまりとりふきを程及しるおく
■ 石乃吳井ちたてる戸の口 水
石行ぬおもあれとたいま人件と立吳を
行う石の吳をたる有る戸の口と石ある扶を
宝て呼むと言て行作る山家の旅と
□ 引捨 ない枇杷乃斤方て 水
おの白石の戸口ちるい物ちる件と立吳分の旅
金を行う引捨ないひもの斤くて八枇巴の吳
手義る張と本引捨てるる作人を重て
仮ものと又ものも入好まいくむと扶縁上
旅 廿衣三申 さ衣の匿子元を井扱の旅と品宮の
子て書ものを又て人と人て昌の人と知られ
いまてのく宮の廿房中物を見人作大物を通
来るがなの儀と行う人出れの仮ものるの口
と匿ひしるあり山仮ものと見とあるの枇巴作

るきく美枇巴園左大臣のこの子の中納言と通
なりて枇巴と付けひしくも見とさるなるべきん
あるべき○再校花色のかくきゝ侍るとあるひ
のかさかとアルヤ又色ひ家と家流あ
■ あくさうあくも人のくらひ
◆あるひ引抜くゝ侍ら人の年年そ他の年を木陰と
押上げ侍ら人上皮を分うあくさうあくも人の
くらひと 源氏葵 秋後二夜の後の時源氏勅使か
きに一条大納言あそなをかせく葵を中に六条れ
景物の思て出るよ辺と葵上の年と又信の年と引
見ひさとき忘れ侍そ雅人とも不年して内裏不
のなを後く拝やるとそ福おとおくりあもとめ
あく押やきんあくと浦ひも人又て出れ
す意人の源氏も足すを尾くて思あるとあ源氏
葵のなゝ月を付て通のとと内裏不の年と考で
ゐゐゝを絶とあんあくゐあひくるあと後源氏

内のひて次このようあ人のをさもゝあひといと
をくゐ子拾ひ人引抜ゝ侍ゐ去の拾くゝう
□ 月の秋旅ををさをさ出るあり、
◆あるとムル人にあくさうあくも人のくらひ内とえ
ゐ又次の月を付くゝ月の秋旅ををさを出る
ゐくゝ侍広石山秋旅あと考る雅人と人佐
花の去余を重て正つるを年年の後更ゝう
年も人をさうあくゝとお実て出る拾ひ人おのか
ゐひ侍ゐれ家ま又姿を立後実ゝう
□ 一荷ゐあひ 水 ゐあの木茸
◆あるを出る侍田舎ゝう彩出る旅高人と又立又用を
分くゝ一荷ゐ更る高の木茸と生木茸ゝ六位
時の孤あを拾ひ小高人と生活ゐくゝの世を後ゐ
ら新舎人生年て人舎いけれすと後のたえぬけ
で茸茸飯使し舎設世てあく拾ひ○ゐる去
あれそゐあくゐと沢左ゐ作ゝ

□ 初嵐伯瀬の寒さは坊主とも　水

△前句宝来草箱ハ山桜の床ト見立其人を付より初嵐もつきの寒の坊主とも云ハ冬合連立て後の山下るに別ぬ冬箱を山嵐に吹れよつく下る姿之

● 菜畑ふむなと嗚りたてり　兮

△前句坊主共は背負寒坊の権柄を憎む体と見立其坊の姿を付より菜畑ふむなと嗚りたてりト大畑中なとの行合によろ人を寒の怠より大声して叱る姿頼憎き風情之

□ 去年えを夕かくに撰よせて　、

△前句菜畑ふむなと乱す早後より嗚りたてりは向と見立ろくさき姿を付より土肥を夕へくにかきよせて夫ハ我分家内の者の程なる様もに出るを菜畑ふミて居振子なたひ作手なと乱とかて声するなと△土素夫ハ畑去に素片をそき干付なと立て用るなよう

□ 卯刹居手袖を露路わきさ　水

△前句去年えを夕へくに撰寄て お旅の体ト見立此よぬ拾おを付より下お居手袖を露わきト云お旅く秋に障しい何とゑ上こるに下あれハコハ何人の居しれむさそ袖露路く秋くちひと哀すり姿之○下七字作とて迂意之実ト□拾ト後にたぬ卯おト障的に作るなと

■ 通路の実張去けて通路　、

△前句下刹居し人に拾れむうき忌形体ト見立其路を付より通路の体張去けて其路ト八嘘陀の路なとに実張抗しるるの呆たより其子とてんもく作よわ菊陀の上より去居るに隣陀とて袖を裂て印おを居し後に拾をれなも我名の形むとんを痛る姿之△前ハ捨し嗚るれい実よそ夫峰を立より

■ 去佐にありし意の浮みわさ　兮

▲おのゐ家をの五ゐ〆と仕す仕一人五人若侍者
うゝ仕るあ[illegible]意の降気さよ初冠の比い
見き実代の田舎さとさきさ入りと差くり
し分の花を作る拾く○大イセ物語 秋宮の侍共
恋しさに秋宮の屋内さて葉平の秋不思議
ゐあい実代もあく自代も遣くり

□ 代まおゝ以安くと清お仏言ア 兮

▲おのゐ大位さ年差の意の名の名さ若男寸仕時と
人五 他りの拾さたくり代系只あくと更衣て人
人の交合くさきさ言く毎くい名彼五下
名付奏一妹あれい意文さあきしとあるあくむと
あきんちる拾く○大言階階高人更衣出生の子之
秋実拾の言階あれい今さ系宮けきさ更衣
さ代系ちる拾只お人拾の屋四さ代白い更衣
し方さ言さ中白あるそ

■ 徙一要さ中かを一ふ一 水

▲おのゐ月さきあり代系只安くと更衣て人五人
れおを附する拾さ付くり徙一言人五新
拾のゐく強さきさ和あれい侍男すと系見
陪あくさ一人の口人付くと只さあゐあるさ上さ糧
さ所れてとお五さ拾く○大徙一人い金百匹
系くりいさく往来ちるの旅用糧い拾の用意
合五五さて乃切を言くり只拾系

○ 月の新号附さ名くちむ 、

▲おのゐ徙一人と糧一言拾くを人て更用を表寸
る体さ人五号付さゆ拾さ付くり〈れおと変分
き上さ糧さ付す実い生活の意ゐ言の意ゐ言一人する
強くる体さ人五人五の付徒侍さ系寸ゆ仕
さ糧い拾拾生て侍実ぬ和あ十寸言一ゐ求て十
人おの言るの徒お所す拾あむ

■ 花咲かれそんまあゐ 兮

▲おのゐ新記の屋居さ人て号付さ名くちく只拾

とみえ直人の膳を付くり 若病人あれば人もあまたあ
りトハ年比の病根て落られ又此年あまたあり
ますこと此すなはち○[再校]これぞまれ也・とハ深くり

■ 天蓋をまた次の服まし表の香　分
大吉お白花咲ならば此比ハ人ものあまりは白と見え直むる孫
あるべきなり まれびょ次服まし表の香るトハ
此比は慎まぬれば天益の若者侵して次食
好むは血の道の病の嫁てそ咲きならむは十五で代
あるべし○[再校]天仙薬とされと似ら手

□ 年のはじめよ肴種乃本　水
大吉お白次服は天薬は勝ってんと尾主の此寺仲と見え直
服後中行る用を付くり 子舎子肴種の中とハ
小僧と二人位の小尾之夕服杜也尾主は移仏乃
肴種は出るとてみと往也て来る村に子舎を
よ去年と遠町方は帰合る由取るすと就来
小僧は中行るべし

■ ただ人と成てきるおおそきり、
大吉お白肴種の名ある金が出る世を悪さる人と見え直貝
人の籠を付くり 只人と成てきるおおそきりとハ奥
様く隠ある上方の屋人あるは深い平人は之
あるも仏なく出る名有や人来て勝まひるを襖
あるは屁利してんきるべし

■ 夕方七ツさき酒呑んでやる　分
大吉お白あく人は風来客の古忌供で忘るる体と見え
直手作の用を付くり 夕へ七ツさき酒呑んでやる
とハ酒席の客ある日の開かれば酒汲み子中は見え
なりと古忌おそきりて手伝する事あるべし

■ 駒の宿時々信濃乃子は甲斐　水
大吉お白夕べく酒呑客と七ツさき宿屋とハ見え直大
勢泊の籠を付くり 駒の宿時は信濃乃子はか
ひとハ毎日く湊来て泊りきる事[大]又子年根元伝
信濃月駒迎十五で甲斐の駒迎は十七日なり

■ 秋乃あしゝ 昔伊勢物語

〈昔時も乃ゝも弱引屋の角る来て旅ゝに初と
又立行空の秋後を分て秋の風ゝ昔伊勢物
ゝ廿年の去きくお掛く都いおの移りて今ゝ
美方孝文のゝ成ゝを如し伝のく方ゝに昔
伊勢物の掛りるを自慢んゝ信るゝ秋の風
の一冬ゝ移るすん地ていとをゝと性子おく 大
昔伝説伊勢角の西撿校伊勢お信に冊子を
つり乗一業跨十二神ゝ乗一十二匹の言を信り
角を吹て拍子ゝ門人東間度月毋やもて
都色に一匹を作る変世の帝敷説ゝて伊勢太
文を文好ゝ〈今の伊勢りゝ矢享元年の比迎
松門為宿花て作始ゝ竹む筑後様文作ち
む正後ゝ乗ゝ伊勢のゝ

□ めてゝくも吹れ 生乃美 水

〈昔昔ゝ乗ゝる人の昔伊勢物語作ゝ立立乗

七ア 三

を分ゝりめてゝくも吹れて舞る生乃美ゝ初
嵐の秋き時言生ゝ乃ゝ立ゝ初れるゝ乃ゝ毋の義の
伊勢ゝ乗一昔伊勢物の伊勢毋出ゝを人ゝ
めてあひゝる拍く〇ゝ乃ゝ辞酒されい
て毋けるゝ作ゝ

○ 八日の月乃寸きゝ 兮

〈昔生ゝ乃ゝ武ゝ作ゝ立立弱ゝ矢る拍を分ゝり
〈伊勢ゝ矢るゝ徒ゝ宮ゝ安いめてゝくも山
乃弦味をめつる作ゝ立立常世の去を去の橋
ゝゝ矢作の武を分ゝきゝる

○ 山の陰ゝ松と樅と水

〈昔月の人のふゝき作ゝ立立山陰の桜木を分
ゝり〈兵作を分ゝゝ拍 昔ゝ八日昔陰の通
武ゝる作ゝ立立 武十立 本武弦ゝゝ立ゝ弦
秋角弦の船ゝ記作ゝ〇 再板 樅ゝ樅ゝ信ゝ
樅ハムクゲ 樅ハ械く

三一

□ きつきたちこまくくとする　分

▲ある日月出キ山のもと松と柏との巡るに白き犬
を脇挙の指を分てりきつき養こくくと
するトハて人ぐくよ人の梱を吸入てふれ目出の
おと巡る指を目くるめきて苦しむ指く

● 暑き日や（竹トキ）扱をもろり引結　、

▲ある日伏せきつき苦しくくして吸ふす所出と犬
を豆休の指を分てり暑き付扱をもろり引結
トハ妻信坊の豆休ニ移る荒男の右手中ト
分てるやら長あさをもをすす好み忘数も
きつくもろふと梱を吸つて性す指く○やく字付
す長さ付トイ作くー時ふ入用く

● を敷たくきよ所ふ登るう　水

▲ある扱をもろり引結所に紙出る仲トハを犬
用を分てりを敷たくきこ所ふ登るうトハ夜者
の扱を結くと出こを所ふ登るまつさをてめ

たくてりとてる指く

□ おろくくと寿ふる木俣の芽枝　分

▲ある日を敷書れの扱ふ上るを入て明方ツうふを
ろふ仲トハを犬寿ふの指を分てり右くくとわつる
木俣の芽枝トハ陸下入口の木俣宿ニ伯て明方
七ツ右ちむとろくを長金の男ニ寿ふて起出て寿を
の空何ひを敷あふて敷くく指く○起て寿ふを
きを指れ（ニ井ル）三人ケすぷ（ト作）くー

● 乳を乃よ（ニ）と寿ふ切りる　水

▲ある右ろくくと木俣宿のおろくく仲ふ性者人仲ふ
を犬人の宿を分てり乳右の手と寿ふ切りる
トハ敷子三人寿の宿平生来る宝客之おろ紙
性の乳の上指少て右ふ乳凡ふ人ちゃ犬分
ひふをセをやんて英ちくよろむ赤門性ふる
指く○きよりぷい指ふトポト作くー

■ おろふる右ぬ寿ふて一三寿

◆ある記録のうちに、夫婦のきもの
れ、そなる者、人と人と、交情を結ぶ事
考へぬ者、て、二三年ハ、なりて成つる二世の約を
なすも、厳重なる教の目を思ひ、勇て、時を
を待課なる人の内いそうの婚礼もむ

■ 底を分て位をくらべぬ　分

◆ある通路の人自悪て考へぬ者、て、二三年、陽
中と人と、又妹背のなる指を分て底を分て位か
もうぬハ、陰名さもと、二三年、陽みれと、考き
位よりてくるる、孔の指、妻られ、を比妹なる位
もせきるい、夫や、聖ゆとれ、ちーやともつくる
て、何と指く、スマヒスマフと、信く、何まれ、位と云
てスマヒとよむ、て、暦のんらあす

□ 三方の教もつうと、夫とする

◆ある位、変ぬ、序、和の、至、を、る、件と、人と、不
用の、兵、斤分る、指を、分て、三方の、教もつうと

夫と、こ、る、ハ、ち、の、陰、居い、陰、高、指の、再、来て、
こ、や、ち、イ、お、学、こ、ち、く、夜、く、安、ん、く、と、彼、三、方
、学、集て、何、こ、ち、れ、ー、や、と、と、、、夫、く、ち、く、ん、く、て、兵、使
、指、る、高、老、母、の、子、の、代、こ、成、る、指、く

■ 佐、年、の、年、雑、を、合、日、た、き、込　次

◆ある、教、こ、の、三、方、て、佐、れ、年、る、ち、い、ち、つ、く、お、く、こ
む、ふ、ち、ー、と、夫、こ、く、る、件、と、人と、仮、の、宝、居、の、指、を、分、て、
佐、年、の、年、雑、を、合、こ、た、き、込、ハ、人、迷、人、の、教、こ、雑、れ
、の、ひ、分、て、こ、年、る、た、き、ぬ、ぬ、て、し、こ、ち、を、痛、て
、合、陽、く、悪、入、陽、る、を、集、る、方、あ、ち、こ、る、家、こ、陽、る、く
、た、教、の、佐、れ、も、決、こ、三、方、の、宝、あ、り、あ、れ、ば、た、き、夫
、こ、後、指、て、年、の、教、指、を、悪、て、指、の、迷、分、く、人、陽、て、人、年
、天、を、大、体、年、こ、こ、雑、れ、ぬ、ひ、考、く、夫、因、栖、の、宝
、こ、年、こ、入、セ、ま、ひ、佐、く、[元]、ペ、方、角、を、た、て、そ、こ、く
、向、そ、る、ん、ま、ハ、打、分、を、陽、す、て、て、ふ、月、ち、〇、た
、き、込、て、後、三、方、や、指、れ、い、ま、れ、ま、ち、こ、ー

□　涼しさや小塩大原嵯峨の冬　水
△京の俳友の芋雑を京杉谷にもきこえは句と見たる更
より又俳友の旅を行くり涼しや小塩大原さらの
とは俳名[illegible]上那のちよぶ上所より杉谷一献
小塩花のもちの盛を諸め更より大原嵯峨白試は冬を
ちよ[illegible]松尾より南より小く涼しと嵐山見お
ゆく旅に△すて谷山経来の句は今冬[illegible]を
おて見ちるるに空く清く

■　人員にゆく春の川岸　李
△京の句小塩大原と並てさうと刃し此叶と見たる花
見の道を行くり人夜にゆく春の川岸とは久世西
桂辺の人之鴻月の拾読にて供の豆号にむ伏も
一席あれは金中にてあそびと桂川涯にゆく
旅く△此書集中第二之

月さし昇るきは量の果もゆく

五

月白さに柄をさしたらばよき団扇
宗徳法師の句とみえ出すは夜の秋
の旅と[illegible]支度もやめ手跳る
△これは古人の句をあるは[illegible]句集にも古人の作
あるは宝にも[illegible]せも古の雑誌[illegible]
の標にとは見え○開板やおんつきぬと[illegible]

月に柄を指すらはよき団扇哉

大　万葉「久方のあめなる月に綱をさし条大君
を夜さにもせり　支木「夜の秋の差しくすむ
月を秋も旅に団扇をそ見る」万作する網
さして置いたるを支木[illegible]柄もよき団
扇とみりと万葉を橋として支木を云張る
法を之方　于　たるぞと係る肘は団扇なるむと
作らるを況と作らるは正しうる仮也り

■　夜の[illegible]夜の秋歌拾　狄人
△不句月に柄をさし[illegible]は其に及ばさき歌にあき

付もあるなるべし扨又の板のきるむすび又の板の
上に月を開板して板の板をさすおのく又乃
板に便万金丹も沙しくもむを板のきるむすび
をもて紙と画板とを板く

■ 三つ子を産る毒を抜て新[振]む　今下
▲おの白板のきる時一概に産る仕方と生産の初
をなすとうとうを産毒を抜て新しくとハ被き
戸柳ゆてうとたつ板にむをひあり新る徒
りえてうるさの板よりくるを新七と浴く
板く○新ぶハ待ての自然らぶハ産の推産乳
い産毒をてハ用に付されハ新ぶ。毒ハ仮さ
○ 広をあき用次乃おとく　下
▲おの白今産に毒を産毒を新さ出角と足生
お発に板をなすうに広をあき用次の産ハ舟に
て用のまもとすあく〳〵出風とハヤと強き
新ぶ後をて新あ下毒さおをて人々として

仕方をすと無毒を板く

□ 玄木根瘡押して寄ろ下　人
▲おの白広をあきに　おま風茎て赤を動さ
仕方と生徒仕方のハ初きを板なすうに根根瘡押
て寄毒ハ生すくかもうさを新毒の広をぬ
風を強て新疱の瘡発くを初寄ろ下
もあ寄民根ろあ毒をて瘡と風の仕方を行
みる板く○琴門保氏の仕ハ保氏を足ぬ板く

■ 使の去ー返ろ下行す。
▲おの白用仕をて瘡発根くを寄ろ仕方と生産瘡
の板をなすうに使の去を返ろ下行すハ返ろ下去
毒をまして瘡発根を毒ハ産毒をすをれて自毒をて下
て今ぬあハ新行ぬ毒とハ板く○内根
根いもうをもむ板に使も四孫の毒ハ一配く
■ あれてまと猫の子を振る板くま　毒
▲おの白使行するハあを寄仕方と生産猫や板を板なすう

因る林廣記試猫従頭提着若尾起則為
純若尾順而不収抵腹下則捷ヒテ会稽
する用之猫にて了故すてしに付て断するにかくり
若の用なく癖なりむ実は我ふの使を床中に置おく
体ト云ふ[ ]内裏と見する若肉の汁ト称する又新書に
へき使ト云ふ[ ]山吹の如しなりを見えてトするか
又音にて家席もありて使用には要用とはあめ世ふ
ちて癖になるか知られは要趣を志を老るなり
□ 手たくるをは房なりたる 下
△ある人是と猫の子に見る中のこと気なりと比尾と
云ふ 佐中に強き指を付てり手写するを阿房子
ふくりと八雅を門は手元中ち思付むと思ひしを
手を升するかくの如くするはいちしきかくと歌
の趣目もあきてぬ写し指之
■ 何ゆやちて手の内見せてお見
△ある手くるを比ナ 若合て阿房ぞする人ト云

云う更曲を付くり何ゆやくて手の内見せておほ
ト八雅き時は人並の志あらしをそちはよき雅
に思はくるおあり何とかくて言ふかられ称に
色上毛の子とめ生涯婦ほや長き志との
なりおにおる指くかゝる人いろくもあり
□ まみゆる付に汽ちる寸教 人
△ある手ある人でお見に流る体に云ふ[ ]更数を
付くりまみ受くる付に流ちる寸教トハ癸する人に
ゆくおねと歩て若に夜ぬる指之○此房お思
にあられて実地に房くり是手なり白を中すで
試るにあるに是阿房白を治にやは皆意情とみれ
と意の治を実に尋し都に指くかくり[十返]舎
実の先後を知るは実の手にかゝる時は又法あり
此お思は実方意を見夜て是を出せるのおト
云ふ[ ]猿猴で味方散乱[ ]化敵て本の悲
阿保ト不成我後のお思になる時は情は後悔

と書て世の風俗とあひこゝハ老実の老実ハ故と

■ 大哉の人ハ法華を去おされて　人

▲ある時ハ[illegible]腰さあるを子供の腰なと

又ハ左又ハ[illegible]一指を付て大哉の人ハ法むをさい

あるされてハ七子なるを知の字位之なる知の

いるを中ハ見て法むを此七を以なの表代仕て

法ひらかるあるゝ郡の次も依仏と変ハ

辻を分て年ゝ○て法出るいをゝき中ニ

伝表のゝ乃猫稽件あり

■ 月の夕方ハ約縄縄ゝ

▲ある日て字大哉ニ法むをあされあるおする

件と又ハ人葉の用をなゝ月の夕ハニ約縄

ゝハ今仏ちあひ此英ニ来る門あの表ゝ

件ニ来る中ニ人法むの表ゝをあるちと

と年も今縄おあるゝ〈家ニ字位の表

を事あ廉とあひ大哉ハ伝ゝ集ゝ

と文候を抱する中表あの法高き時の定法

さる対いゝ代又用のゝを□分ゝ中も本宝ゝ

□ ゝ〈榜も表ゝ〈月てるおゝ約縄縄の下おす

▲ある日月の夕ハ月てるおゝ約縄縄の下おす

る件と又ハ人葉の表を分ゝ〈榜も表て

榜も皆表ゝハ木棟榜の大枝ニ縄引をゝう

つもゝ〈榜ハ表ゝ高ゝ表ゝ表ゝ拾年て喰

又て榜おき表ニ榜ゝとお持る榜〈〈も字

榜の外ニ表ゝ表る喰おあき表ゝ俗の用ゝ

○ 杖のゝ〈きゝ乃畑又る客　人

▲ある日試る榜も高て宸左おき件と又ハ春の

法表ニ外又る榜を分ゝ〈三日のお合ゝ表

榜ニ喰おニ客ゝ表ゝ〈ハ法高ゝ中後時候

と又ハ□秋のゝ〈きも又ゝ西天法ハ乃中

する人の梨榜のゝ表ゝ来て都と時候の匠述

を表ニ榜おゝ蓋我人氏ゝ自他をゝも

□ 我伊之介の子を背負へき　人

◆ある人相ある客に故あて立ち寄る人と見て

文人根の推察を分かり我伊之介世をと

背負へきとハ後世の事なるを推察居て人のむ再

新の空多く只後世三昧の志あれも文之教

みられい空の通ひ伊之介世をかれむ宿のこと

の推察を推へ伝へきハ推云次い伝信の仮へ

□ 春あり〜かく文字四つむ戸　下

◆ある我伊之介を背一人を入て我もろかと発

む伊之介を背文人の伊之介を分かり春あり〜かく

文字四つむ戸ハ蜀山の拙号のてき新と文字

の戸を使てあるを入て宮を春あり〜中おあり

むかる使鬼とあり面白ろむと入る宮の

新る推へ〜意を伝へる伝へ

■ 老の哭を悟る病おつ　、

◆ある病中の一を春あり〜出て戸を法を伝る

伊之介を背文人の哭を悟る病

候おつハ伝ハ老ハ四十二の世捨あれい病ひ

後世さむと一を詠る文字の邪を入て悪あ

一を法ひ子い未快くめ病て心の安さて

とあるもれ〜因正月より六月を生て去ハ

去年の哭七月より拙月を生て人い秋哭

の哭を行ひ○国仲夫我子の孝妻九を

を切て多田侍の子美丈九の弟代とを哭

文九の四十哭を仲夫を宮出の悪病ハ百を

■ 宮おり船の伝き春ら七　人

◆ある花の哭のめてきを悟る病居寸伊之介

病我船を分ら宮おの船の伝き春の日ハ出入

の祖母の伝伝宮て序を列り勿き時ら育一

子文二歩の四悪を新る中と借り病我む

船伝き神を入れ月を寸て病る推〇邸

字少寺去の日ハ悪後ろむ

□ お殿様の宅東の内千人る　人

◆ある日去年さる祈祷で落れ出る件と云

又用を付さりお殿様の宅東の内千人るとハ

祈祷ゑさる内婦女の長白の傷ねこ出るを入て

居者ゆく夜裏装ゆしむ所の宅東の内千

ま祈祷とゝむ所ゆゆ

合て酒ゑ与ふ○再出久々と信さり

□ 内くもんりて牧吠る犬　下

◆ある日お殿様宅又新ぬ猟人の傳又あと云

又て能ゆるゆきかさり内くもんりてゆ吠

る犬と人新ぬ傳犬の門と殺る人を吠て存

おれゆ吠ゆゆ入て牧吠ちる犬

● 藤沼の水の吹きけるあや　、

◆ある日内くもんる人の居長て吠る件と云　居藤の

水吹ゆゆる居長と存さり◆又吹る言人を

存さい自他さゝて伝ゆ吠ゆ居ゆ　福

ゆ入ゆ人を殺ゆ起す件と云　今昔お語　猟犬の

ゆ人を殺ゆ起ゆゆを　□ゆて　みの口を待る内

の上と云　内の外ゆて吠ゆる目見ぬ内ゆ内の内

入て牧吠て起す居ゆ吠ん犬ゆ

● 兵部卿の宮出ー　人

◆ある藤さゆ居藤見て外ゆ吹ゆ出る件と云

藤汗さゆ居藤を付さり兵部卿の宮出ハ

藤さゆ水ゆきけだゆやゝと天ゆ抜ゆて

隆七ゆゆ人とお居てゆ抜

□ 寿合猫法師を捕る

◆ある日猫法師出て兵部卿の宮ゆ

法人ゆ抜を付さり寿合猫法師を捕る

ハ服部宗茂ゆ居ゆ居ゆる内の居出ハ

さりしと伝伝て門と出る人アレ〳〵二人連て

あれゆ人ゆゆワト字ゆ伝て吳ゆゆ居ゆ

太郎井性ゆ　寿合の時所昭ゆ聖ゆて

独活を拾ひ家を造りて住もうけて毎日ひさうし
ケ所中の女房俗の独活漬と号ケ所
■ 又献立乃皆ちらしひらり 下
◆ある寄合の独活漬その辛子付うる件と立
指身膳を付さり又献立の皆ちらしハ陸か
和の汁にて出し遣ろうてもに指付辛子指付て
高用ると御ていおく○大本和指室数何古数を
元和下之人不用之出を及やら数と元ら五ろ
那之雑冊をろあ〈陸ケ〉ろ表こあの数之あ〉ぬ
を又作之さくと書て出ぬ又寄指之あ〉件
と除和の献立ろ表ケ所ろ除すハ指ろ
■ 灯盞の油切〉て押使 、
◆ある再七献立の皆除れぬ指ろあ〉件と立又
又立を付さり灯盞の油切て押使ハ指仕
向〉献立い好みて付さり御仕之〉と又出ろ
ろて仕ろる指急油ある入れいく〉やむと和

或〉ろ〉之人之使て仕之する南〉き指〉
■ 白を起せも陸掃とろ 人
◆ある灯指むて書ある〉ろ〉ろて件と立
書ろ見ろ指付さり御之ケ所ニ多の使め指寄
御の柳ず灯盞と又寄之指之ろる搗白ろ陸
ろて指むと多を起て指むて白の乃
之書ろを見〉人之使て独多之辛して白を
起れい又下之指〉四茶金のそ〉と数之元
付ろる之ヒヤアと再茶ろ〉指〉
○ ふく風之ろのろ茶乃ふ〉と 、
◆ある茶ケ所ある西の白と立又房のあを
原さり〈呉指之のろて陸そ寄い使石の
白を起す件と立「今要ろ風俗の茶ろ乃原
穴トセハいとをうろむ
● 羊も出はて原山乃秋 下
◆ある狗子牌ろ荒廃地と立古ちあ陸之付さり

〇立てる風を付て宮い物子叫新て唐き
桑原よりと立□おかめの唐母子化中十七八秋風
のふくを付て芳今の衰を歌する拍あむ

■ むろくと月又る歌の歌に似て　下

〇あるまいさ子字氣之る座と立又京を
脇る拍を付てむろくと月又る点の歌に似て
ト秋の宮座を月又る仮あと書て格
本を払ひ快と月又る拍を客の又て歌客
い歌に似てるお母い歌まてふむと月又る拍
付く〇天日本化拍古帝九年百濟より西方
阿白の去来く南座を仮仏及点物の歌を宮く
路子の巧と芝者と号たり又子の代れ
も宮山も宮もむ点絡て麻こする附会と

□ 人乃文ヨもこ月るもの　人

〇あるむろくと月る歌ふも歌に似て正面又
立□拍手ときを拍を付てう人の文こたるもの

ト人　金文ヨこうるる人文こうあとて歌の遠
云ち信る石部金吉の昌子と凡の美又云
る氏と人くのさてさする拍をう

■ 姫ゝ凡や苣やを荷込　下

〇あるる人文れむを又て伺拍れる三あ一に月
と又立れて拍を付てう姫く凡や苣やを
荷込テモト村出の宮おゝむい拍凡や芋色
拍りる入仏ヨこあゝひを古うすまこ人の謡
りと姫お又て鳴する拍〇禁言凡や拍ト拍こう
天苣ト苣も飛之天ゝ苣七周切麻く子周切苣
苣之片家い苣ゝこうる白色重す

■ おもるるこのおろくゝ町中　人

〇あるる姫ゝ凡苣ヨこ苣ゝ書込む件こ又色来こ
付おるこを付こうおもるる書込む件こ又色来こ
の古用干おこるおを市出荷の昌ヨきを通こ
ともり重ゝ新す拍ゝ

□ おろ〳〵と小法の宿の是叶分　下

▲ある日千尋をあそこへもとて新す件と又是俄
夕方を分ておろ〳〵とまもるの宿の是叶分
よく尋て見て森ち比男声をたてめきるゝ
弱き森恋歌を出て尋入る人の居相にて
れ木伝ふる拍子〳〵おろ〳〵ハオロ〳〵
みとりまに〳〵恋ひんこさるをまもろと引をする
いる拍子之因或ハ七条四郎ちくちて男むろ
おろと呼ぶるる御手の白木仮の辺てえ小法の
惜ていに伝ひ近分ようこすまを居ち居片

□ 居同者〳〵やを　合佛　人

内ある小法の宿して是仮て人の男居る件と又
ち二居之ち条を分てう居同者〳〵を合仏ハ
必き叶の神教と一ハ合仏する拍片

■ 百万も和歌よ是之のち　下

内ある居同者居さが陸原ちの大合仏と是只

物の歌を分てう百万も和歌ちの去ハ昔
百万の子を見て和歌り寄て仏弟を
見合て合仏ちの去を歌する拍之ち
ハ名あれさらを居百万をして大合仏を歌
したり片▲百万い南部春日の祝子之まこおて
後ろを又て和乱とあり中髪を乱て古忘
あり中歌て見さまるしさう秋田男の合仏ハ
乗ち我子ハ急ちやせしと拍ち居乗の義を
あり乱い又和多集ちる中てちう我子ハ
ちあして連内ちり○□歌ハ恋ハ歌之歌ハ
い絶止ちう又て休ちう中ハ又中ハ峰寺
よく〳〵ハ叶い人居の同者ハ合仏する歌ハ百
万も寄ハて中ハ連ちりハんこあり又やハ叶
い百万も和歌あれい人居合仏ハんこあるこ

□ 田乗きれて　人

▲ある百万居百万人も和歌る花之和又左

是ニ越ての事を行り田楽されて横さひきと八名
言ぎ祇園の二軒茶屋も名高も揮毫にける也
やらぬ角来さゝ田楽抑て播人なも心掛と専志
かる指なりし○此去ト蕉翁ト趣向其の三
意集中ニて勝なり

深川の夜

丁々寺も静まりけり醅すや　弐人

因 ひとすら我名をかけは巳さくらりくとみえ答き
涼けれは立く作郎ときく時は不寺なるを知たとん
止て静に雪見ると尋ね往かりくと喧き声とら名作
○両判 うかひきやト悟り

▲ 河声ひ知らふ飛去夜の月　翁

本るも字一ヶも静にきけり喧すやト涯なり句と
人去ひ人喧き事を行り河徳の弐比の月と
称名月 秋生之称と指合抱方ニ徳さ知

てハ此方ニ徳る欣仲方の中ニ一人下戸の風客
ありて毎秋の徳合ニ徳独孤足月ニ帰りなり
丁々寺て洞深の一句を吟する者之○廿七番 主
客自分の遠付に因徳知子ト云秋を向ニ抱さ
れハ仲秋十五夜の月にも指家之河徳ニ熟古
まもやしらて秋れも守了守

□ 菊襟雑の窮屈ニ重ねても

▲ 本る河徳知子此比の月ナラス比酒客ト父走遊其
諸の笑ふきを行り菊襟雑窮屈ニ重ねて
むトハ床ニ活てる花を見て其の名ニ襟とい
窮屈の付さんなるむ是比弦の徳合連中ら
ちハ探そ仲ちる居ならとお定指之○評判 座ニ
襟ハやく窮屈なる盲由なるわを婚能美只
して作りると議る指只辞遣之

狸をもおれさる秋の夕暮　人

▲ 本る雑窮屈と然るを秋ニ指ら人の花ト父遊

又信を付さうと人々を西と作り会場の四方
ヨリ信を付ると是を□れ跡にて座の久さるとセハ孝
にて会釈とも信の人い全体ゑんむ全体
家い充座あり名の苗まゆみてかくて河ト
又ち□掛るの名も書もの社頭トセハ或人い
苗をめくりて掛るに石まに出苗に対しきる
るも書でにんと記信せむコレ宮居の掛方ん

□ 新屋の大きさ五尺むくりあり 人

▲おるを信を脱る旨 信の上に大なるおを入て
河と入ち□又おを付さう新さんの大きさ五尺
むくりあり トハ新形の張りて秋のりの苗ま
き掛を入てさく〳〵大と育さあと作山さりふ
掛く 歴 親王貽我大瓠之種我樹之
成而実五石以河を掛さう人は苗ろ信ノ
字あらはる記信あるむを弥会○歴 信の
の人を周荘と入て五尺の新と行さう人は掛苗ん

荘るの加る中新さん作る 俳諧さん何の俳
ても おの後今月のお荘とあきるの作る
■ 風さ吹れて降る市人 義
▲おるを五尺むくりちやト降するら大新の作おト又を
又お人を付さう風さ吹れて降る市人と祭市ま
掛さる大新の作る大国廟のときさ風に動くを
又あきれ降る人を入て夕新形の下原おて風
に吹れて降るワイと降する掛く○厚 大新を市
の奏おと一部と夫さん風さ寸 内 巣又今木
に入てる新を風のあ寸俳と掛るあくまんて
五尺も市人も少ます
■ 何ろも去安い是名利の地
▲おるを神ノ風に吹れて降る市人と是風ちの
元俳を付さう何ろも去あい是名利の地トハ
或い往巾に掛を入て是去新に廣地ろ
ちし或い要を狭さ或作ま人個あり或千

金の空家を為めとて居る名利の風を名
や拾をり因出安古来名利地空手
無金行路難に付くよりあり
○ 医乃多きを見る人
▲ある名利の人を待む仕と云医者の浮を付
さう人に自用とて作なく衝動なるめられと
家を名利の人に分め先くに廉なる為れ
を家に地字を扇に云ふ自戸に字頂め加
に家族とさら拙は辺の畑のりきまて市場の
名利に問を実をちくすあく○陸辺医者
の多きぞと指さり
■ 忙しと閑者の空よち生て 義
▲ある仮初やに三医の多きを月拾れに対左
云合の人を付ふに出入医多き為赤て人
い代くさの奥拾やうに乱引を大
野の医をも店の多きをするに公侍町

人の表に人に遠く内閑き閑者の風位
に居ても多きと独ぞちて実用閑に出く
家の要の雲木作なむ○陸辺巳も医と口きと
するく医の多きを月拾く忙しと生る拾に
人遠く閑なると閑者の空に生て表に医者の
医多きを月拾に自白なむ
□ 独セ活やくきを乃仕取 人
▲ある他に力忙しと閑者の空に生て閑者
者夏用を付ふ独セやくちの拾れに好の
閑居と家内の忙き用に便なくとれ合ぞち
の多なく拾者きと天岩に人後位の七と
やくとんお母と出て閑なて坐する拾之
■ 氏に古き玄番の名を伝へ 義
▲ある独セやく氏ちの屋号は那に云ふ
夏人を付ふに氏に古き玄番の名を伝に
代く玄番を名のる人土なむ氏家

より走ちりちるれ後位氏人のくまあれ
■ 足弦もをぬ面乃曙 人
▲右の古き玄番は中ごろ久しき指柄の家と云ふ
威勢を分ちり足弦もうもをぬ面の曙は村氏
の恐怖て敬ふ拍を玄番ようもをぬ拍と
云地ある人のさう子口する拍と〇[奈良朝]如支老日
式村と古き玄番の名を伝ふ不殺もうもをぬ面の
夕雲とゝ和の曙おすもや箱日恐ふ〜後語
も氏るとおて分るゝ丘幸也ととあれ〜ゝ夕
雲と弟白を化粧て和の曙とゝ〜のこゝ
す俗の拍をもつ〜」より 曲高日式村不り
夕雲の遠い国記の矢ゝ雲あと氏白を拍と〜名
るんあゝあど白人八白人の対体を名さる
弦と箱と浦て丘幸也ゝ寫云ゝ明服の人待す
まきう美箱後ゝ弦と和もてそを又俗ま
拍雲るへきう或人日弦稀を拍柄ゝ久〜いと

まれくまれ玄番と云れ名とゝ和の拍あ〜
すや 言日拍す玄番は弟人あれゝ云れゝ和
ま村も足弦ぬくゝ中人の拍人の拍人の子
を分れゝ稀る白あ〜と和の弦稀を寫す
ゝ和ゝ中ゝの分く支拍を拍と
弦〜ゝ玄番大猛ゝ悪人と〜ゝ水と反ゝ強男
とする浦ゝりの拍ゝむ俳社ゝ子せあれゝ玄
番と弟弱の人あゝもゝ又む陰撥拍変只
作去の自主拍とあゝひゝ〜
□ 衣ゝやあまゝ女ゝ〜何てやゝ 箱
▲右の箱面と足弦のむきゝ〜ゝ哭〜人と云
人を分ゝきあ〜や余ゝ和ゝ〜あてやゝ〜ハ
明の和乃俄面と反拍ゝる多弱安を衣ゝと社
と反やゝ箱ゝ和の准を新て面のゝゝ和箱
と加てゝりゝパハ宮和の脚辞其文陪ゝ〜く又
箱ゝゝゝ又其方のおをもゝ〜天てゝ衣ゝ

かわそく（カヨワリ）ハエウチナ　あてやうハおとこ（ヨロ）キカタチ　○（評注）
以弦ヒ　ものあとくを思て　ゆる　指と　又こうハ
詞の内　連之　家の人の　ものをめるゆえあり

■　風引たる　声の　哭　人

◆　ある　架　くあてやうハ　ものひと　又　指子
を　ひく　風引　弦　声の　哭　ト　あく　セ　ひと
いも　持　文　くあてやうと　ものく　○　因原氏　奚
弦子　上　形　の　伝　非　ハ　風　邪　まあた
物　さ　伝　弦　日　衣　ものあも　ものを　振　れ
指　あれ　声　ものいも　あす

□　ものを　ものを　振　ものを　ものを　きぬ　義

◆　ある　風引　ハ　教　内　伝　の　着　衣　する　伝　又
立　人　を　ものす　指　を　ひく　ものも　ひく　ものを　指
もすてきぬ　ハ　物　を　ものを　ものを　ものを　ん
ものを　ものく　ものを　指

○　お　傳　ものを　舟　ものを　人

◆　ある　食　すきぬ　舟　人　又　立　傳　の　咲　ものく
◆　泡　を　舟　人　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　伝
ものを　食　ものと　不　宴　ものを　伝　又　立　□　物　使　の　人　ものく
ものれす　ものを　又　ものを　食　ものを　又　立　□　民　の　歌　ものを　ものを
ものを　会　ものを　ものを　ものと　人　の　形　程　ものを　ものを

□　月　と　老　比　民　の　ものを　峯　を　比　て　義

◆　ある　お　傳　咲　きもの　夜　辺　ものを　指　手　舟　ものを　立　ものを　物
の　無　を　ひく　ものを　月　ものを　比　ものの　ものを　ものて　ものを　月
を　手　ものを　西　ものを　比　民　の　ものを　ものを　ものを　ものを　人　ものを

■　雪　老　さ　ものを　比　ものを　比　乃　孔　数　人

◆　ある　ものて　ハ　余　ある　南　ものを　ある　伝　ものを　立　畑　お　の
指　を　ひく　◆　ある　月　ものを　ひく　ものを　ものを　ものを　ものて
に　指　子　ものの　一　口　後　ものを　手　一　向　上　辮　天　ものを　月
花　の　乾　悲　ものを　物　山　の　傳　雲　の　袖　の　白　ある　む

■　彼　戸　ものを　行　お　ひく　ものを　去　乃　来

◆　ある　孔　数　ものを　袖　ものを　ものて　伝　ものを　立　又　男　を

行くう彼戸ニ行おけるこの末ハ日永乃
比の小道作く古行ニ袖引ぬむと孔扶て腰
ニまきてるる姫様取又のまゝ人型ニ
□ 店もさひ き麦の抒別 箱
▲ある彼戸つるを田舎町ハ又ハ又家の拵を
行くう店ハ寂き麦の換ワイトハ店先ニ麦ひ
くを入てくきてあき陰くと思てるる
拵く○傳記 農家ハ目遠ク
□ 家あくて服術ニ色むき後 人
▲ある店ハ休ーと客作るる拵て式家ニ来る使
ハ又ハ拵の拵を行くう家あくて服術ニ色む
ま後ハ式家の娘の化粧仕て小服術ニ
後押色風の姿ニの古常着仕るを生代の
正ニ来る男のイ丶と店先ニ納戸を
店飾してある拵
■ おもゐる神子乃おゑ 箱

▲ある えくう家あくて服術ニ色むき後 神
後ハ 原作 又ハ 拵 みるを行くうおもゐるみ
子のおゑハ先後を立都おて数目を閉お
るるち張色の移てるの色を生行ると陰
く都ハ陰ニ孔神ゆ行て御後を立て
き数て後ニ品性ある拵て都孔行行
後色物拵をおもゐるおゑ子と思ふ後
△コハ振出ここ又ハある様ニうもあ
えられて生るもあ○傳記 極ている行ハと
ふるハみけれと終けて成きるこハ自箱ハ
ぬ移ーくいるある行と定ぬ行あ人きや
■ 人去てゆまこ成の白ゆる 人
▲ある おもゐる おゑ 皆 後の人ニ立ち拵 件ハ又ハ
神乃後の拵を行くう人去て来ハ後の白ゆるハ
いるある男遠ニ後ハ ひむニ神乃手ここの立おて
人自せられて思のこ行も後ハ後ハ行の拵ま

ュ公秋悟て人そろュおてュ拙さて先ュ下向の
君ュ子人舎ちュ子ュ和ュ成て色ュ人てとる拙く
大荀感ュ在ちて拙三日の月香矣す故ュ荀令香
と拙ちり山号の書拙ちる人多むちり○小李吉史
ュ法坐ト信さり

□ 初懸ュ篭る壹乃斤 隅 義

▲おろ香ュ子を拙め在ちり新金の人ト人左ュ
支拙の拙を在ちり初セュ法る坐の斤居ト外と
ゐき人の坐て系弦おて支拙く作ュ人の藤考
を思ていゐる義の人ュやュ忘や拙く△茂ハ哀ュ
て香ハュ香ゐるを宮ュ公香ュ財務の信を起
して哀を拙ちり拙ハ初拙おハ似られと拙大ュ
ゐュ子○序辺原氏の伊ハ公ハ悲ュ多芳も也作の
附太をュ遇る和ュさるる和ュ

● 附与嵐のあ子ュ宮中ュ 人

▲香斤原のュ子ちュ通拙ち伊ュ左ュ交ュ拙ての

子を在ちり附与嵐のあ子ュ宮中ュ天井嵐
のあれュ通拙の眠吳るおちり忘をあく附与
乃ハ与ゐュ子ュ与ゐと信る品ュ壹伝人の月ハを
あす拙く○本あるく下信ちり

● 拙横乃さけ家ハ出和て 義

▲ゐる世嵐の荒伊る氏附与きく伊ト人左ュ貝彷
の拙を在ちり拙ハのさけ家ハ出和てト月
附の拙ュ世嵐のさけ哈ゐる附与世ゐ出る
人与ュ和る附与ゐ和ュ拙く△横ト和乃
香ちゐるさいュ泊家ハ拙伊の来の抽ゐる拙く
○序辺嵐のあ子原拙ュ附与ゐ和ュ附与もゐ与ハ拙の
さけも家和ちハ出挿系く

□ あやうくに拙ふ妹ゐ多 人

▲ゐ白家ハ出和て出ゐ多ュ後深き伊ト人左ュ婦
居の拙を在ちり和やうく乍拙ふ妹ゐ多 人ト
反病多むちと出方ュと誘れ拙を肥て多く

深む風情を両秋の見て不詮病んである子之とんを痛る於之○[評注]おやまくは妍しき姿にて[大]ヨクのんにも永く又次の涙と二句死の変め病人室を見るは死ねにも指家之ニハ室を見つめころかれ気情に恒を見る指なるそ

■ 何の雲ら雁の涙色むせく　翁

△玄句意姉ら妹夕眺の其情を楽して居る体ト人ち近見侍の庭月を待入りあの雲は雁の涙色むそよ人室にお于て黒雲の雫をおきてあ雁雲お雨といふも昔もかくやあのゑんたら君を忘の涙そとおもへそて見られるは意味おろ妹之嘆す姉き庭云ふなむ○[評注]姉々んはを寄くる出は人遠く妹とは雁らには他人の句そ

■ 七く月の上お宮にて消さうに　人

△玄句意[雲隠ル月ヲ見テ]あの雲は雁涙色むそは句と見ち近そらあき意をありたり七く月のうちの室

そ侍ちうよ人[源氏夕貞]父ゐ五条なる揚名の妙ら家まタ辰君へ方達てしみ之を源氏請に於ひ氏口ちりて手き不さん安くて明さむと八月十五夜の明る戯ぶ本まの室出とすいさよふ月に白く寄くあくられむる事あ女は忘体にひとくのもふ拒戯に雲隠て明白く宮の事房深く忍びさ為を急き河原左大臣の故歌に移みへ夕貞「山の端乃心も志らて白く月は上の空にて絶や絶ゆむとん抑くおもりすごえは見ゑつる趣之果て次の十六の夜ち来乃哀るの生臭出て深き若しめ夕顔をえ殺れるお哀之

● 佑も至く鵜不居眠り　翁

△玄の句也く月岸為中の侍ト人ち近暁人ちの様々を侍ら佑も至く鵜に居眠よ人家を捨る往来を案みて居眠也く指之気まを瘦て侍菱月ち香の個にも翁の此を召合てきうし

○大夕気をるこのもろ〳〵仮の医分おやくよ
り四夕気の仮に拵象さ中月白を付さ
るなよ所〳〵白ハ夕気の拵ためさ文字二白ヨタ
気の拵も多〳〵文夕気のるこ字ヨも文字あり

□ 秋の田を刈せぬるの出引て　人

▲ある砧も多く字ヨ雖ることおまの乃稲よ右
脈る仲ト天ヒ地平の用を付さ林田を刈
せあるるの出引て井ヨ拵クトハ天陰の代友の
るヒ上ヒれ撿又ある時村出弾出形く休
ヨくと拵張ヨ約をヒさモ依陰目後のヒを
峰出引に風夫併て出引るヨを時の乃
拵く拵の拵分く

■ さん〳〵多〳〵文字向ヨ来る　翁

▲ある出引て字未拵ためる仲ト蓋ヒ陰を
彩く拵を分さり再こ多〳〵文字向ヨ来るハ
文青多る拵氏の茅尾ヒ医家を一教出の世合

ヨ来るを佐く仲拵ヒれ敵とヒ字も多さ人多し
多〳〵ヒるる拵し

□ いるあ〳〵尾麻乃木葉尾　人

▲ある文字ルキ人ノ再こ多〳〵文字向ヨ来る仲
ト尾ヒ頁人を分ヒいるあ〳〵尾麻の木葉尾ハ
あれちの仲ヒ本茅綱目や佐を佐いる葉
陰多ひを家ヒ〳〵いるあ〳〵尾セヒお多敵
ヨ拵佐多〳〵高美往来も拵ヒ多めきろん
敵仁多ヒ字ヒ拵く

■ 弛ヒするヨ乃痩て出へき　翁

▲ある〳〵字弛稜ヒる馬ヒ東ト尾ヒお
ヒ仁ヒめヨ分ヒ〳〵ハ不良ヒ歩き内ヒ弛ヒ
義重の三ヨある弛ヒ弛敵の病発れ葉ハ
ヒ多り神仏ヒ弛ヒ乃れも強く拵ヒ
唐着敵の迫形のヒく字ヒ度ヒ痩弛乃を
文姻ハ弛ヒ他人ヒる衰ヒ尾乃見悟ヒ〳〵南象

と尺て奔走子ハ左の付あるを木葉やの看板
う癇癖病を尺出さるい宣接の工夫し

花の比徒文集も雲――人

▲おのゝかひあき字かう子を口て秋の庭ト尺ち
文を結てゐるを知らう花の比徒文集も雲――
ハ振友達の彼子集さとそおゝて通るき人
てゆるもあゝゝ云所せて集をむおをと
母秋の彩く拓十七八の姫とゝて品渡ゝやと衰
し〳〵庭を引き子庭似れ今秋くお集の老
時〳〵おゝく句と付集口ゝれと徒おゝ庭
の云ゝあきゝ秋庭

□ 田博を合てゐきゝきゝ口 箱

▲おの句雅徒工徒文集も雲――は句と尺ち欣仲
乃の化口を付う田口をひてゐきゝきゝ口ト
ハ徒文集の人工刈て我子ゝ〳〵田博を倉て
口を汚さ付い各と達を徒文少て極乗集

ゆもむあを残今子ゆ云りと国欣ゐゝ庭を
秋をゐゝ拓く〳〵三句の庭拓を蔵〳〵う氏
君〳〵生集れ〳〵も我人〳〵付拓ゐき庭集
ゆて君二ゆゐゝい殊今く

弱工使れて来る人の孫きゝ
蔵云い云荷ゐゝ文や天使ア 夏角
生ゐる古ゝゐを蔵つきゝ云荷ゐゝ文を持け
ゐい云ゐゐ云ゝゐを云ゝゐを雲ア有り
ゐき工我人ゐア有り宴日荷ゐゝ工ゐて
拓者のゐを云ゝゐ集の挿拓を工ゆゆ
し晋子を口て君ゐゐき方一ともむ

□ 三拓さの月又雲ゐゐ雲 我人

▲木句蔵云ゐ工ゐ余句ゐ欣い徒ゐ文ゝ〳〵庭ト尺
君工の庭蔵ゐ拓を付ゐう三拓さの月又雲

あるいはいとゝ行ゝ月の月数七の法文に天ッ
ゝ宣の厂を又続る拾て書の成比の月
比拾の句を乃ゝ引ゝこれ書の拾拾く

■ 菓子秋の座に墨を引掛て　人

▲おの白字あり多し中ふゝで仕合と弃て河と見
左れゝ月又の設セ拾を付ゝ菓子の座は
墨を引掛てハ座敷低くて月の眺仮ホ
と座上に墨を敷一枝尾の並会長あり拾く

□ のすでゝ一茶い拾ゝ　角

▲おの白菓又の座に墨を敷て下次と一体と又
左扶次の拾を付ゝのまて云一茶ゝ拾ゝ
トハ菓脇入る風時ゝ○裏 飲でゝまゝ
ト拾ゝ

□ 雑ゝ来て拾ゝ座ゝ夜　、

▲おの辞辞の茶き乞ゝ拾辞て云一体と又
稲居の拾を付ゝ雑ゝ来て拾ゝ夜ト

辞て原き侯に拾ねセを投やゝもし辞左やセし
とお走夜ゝを辞ゝ辞ゝ来るまのまもし拾一
と囲侯て拾る拾く○裏 侯ヲ唯ト拾ゝ

■ 止函き一四初ウ 陸の ゝ　人

▲おの辞タル人ゝ又テ雑来て拾ゝ夜ゝ
河ゝ会ゝ左又辞辞を付ゝ墨きゝのゝ陸の
ゝ〻ト後病の出ゝ入代て拾ゝ拾ゝ陸附
母の目ゝ入又て四の辞拾ゝを拾る拾く○さ
に河おゝ侯ゝ云ゝ〻のゝ〻ト改ゝ

■ 恨ゝ侯ゝ　、

▲おの云ゝ会の墨ゝ止ゝ
を付ゝ恨ゝ侯ゝ拾ゝ拾ゝ拾を附寸体ト又左悪居
て拾ゝ辞ゝ陸墨ゝ止てハ口侯ゝ付
又ゝ侯合て恨ゝ拾ゝ拾ゝ墨ゝ辞ゝ拾ゝ拾ゝ
ゝ〻てんゝ〻ゝ又屋ゝ拾ゝ拾ゝ今ゝ化人も又拾
又也

□ 辞口おゝ一翁をすもゝ　角

▲右の眼くるぶしに止て侍る件の人を見用
を行う薛は右の毒をすむるに東遊雑録薛氏
強しおて那の海を去拉の俘捕て徒今の医る
拉那美強の孫を同じとも新手と言れと
尾をあなに曲れり拉那の文姫那を治のれ
改るあて孫の毒を人也と数を薛を再
三難すれとも止ることなきれ閉たてまつる祐
強い教を左い拉拍子をおろう[illegible]づやをづ
のをを老人ひ苦を今まきよりもるか
まの山谷の毒をふに分て今一人の孫を
高きゃかまて見い京人皆侯を侍るに拉那
いめを殿に我を改せて乱人を毒に侍き
物の切強ちと如るを改子閉止るれの孫
の逆行く安に眼の用を行あ行を尾ひを眼か
う右くにする用を行る所に記侍とあり
■ 宣性の勧想の城乃侯しき 角

▲右の薛カ独有ヲ以テ能カ薛に毒を毒をすむ
るト怪ム侍ニ人ニ毒病に沢あき拉毒をすり天尺
るお人も多き国中に薛天毒あるを天て見て
く美強におて良ん高(一)とて独きふきらさ
いあるすーきを侍い教の教授(二)に故の和
引もみる世に那(四)の病とふおおて一男二件の眼
を毒すーを正く交那(四)の毒を逆しおあ
むりて正(六)の病に拉呂る拉く安に那
教那の方を毒すも薛の方を考るもおより
あれて変化拉く又美強に毒するあるとも
会教して面白ものあに昔斤貝に拉君拉て牡
強をあるを薛に寓て記侍り薛拉君
あるすい大寓云食あるむ宣接の毒を拉く
あり[病ヲイ解]離想俗ニ云カゲノ病く奇疾方云
人臥片ハ刃ノ外ニ刃アルコヲ見ユ指ヲ別
ナリ但指うサルくに盗人臥片ハ死肝ニ因スル

モノヽ此肝を三ツテ邪を祓ヒテ祈舎ニ
陥サル故ヽ辰砂人参茯神ヲ薬服スル
ハ真ナルモノヽ乳爽三仮ナモノ自化スヨリ
○國枝イタヾキの上略タヾキとよむハ和語の例
を引あ故ヽイタヽ・イタヾシ・イタハリ・イタイケ・
イタツキの類イヽ形容詞多くイヽ美なる故ヽ

□ 像ありける金二万両　人

▲ある教の病の処拒ヽお人ヲ祈ヽを乞ヽ
其費を付ヽ後ありける金二万余ハ函底
なる大刀帯も人参代ヽ果ヽ宮博の投薬ヽ
ホ和又刀ヽ宮博ヽ成ヽ
病ヽ治ヽ家ヽ病の時ヽ
廊とおもひをよく扶ヽ

□ いとおしきヽ子を他人ヽ呼ヽ

▲ある後見おヽ
扶ヽ治ヽ
トハ國近世ヽ人伝　京宮町ヽ宗甫ヽ子ヽ人ヽ
の男子の拙を又作動者ヽて分帯を乗ヽ真代
ヽ二万両の金ヲ生産矣宛人を救ヽ
○とゞ号ヽ作ヽ子ヽを他人ヽ呼ヽ
リト改て孝後ヽ

□ やけと歩ヽて不ヽ治ヽきヽ子　角

▲ある人中ニテいとおしきヽ子を他人ヽ呼ヽ
と又ヽ其ヽ子を又後悔ヽ情を述ヽ
ヽ孝人ヽ子ヽ母の教をやき其罪を自責ヽ
ヽ其母を出されて白ヽれ我ヽ子ヽ
ける故ヽ其親ヽ
ちヽヽハ他人ヽ
を他人ヽ役人ヽ
て後目も患ヽ
上の意ヽ
○不ヽ治ヽ

たゝさゝと改て参度よし

□ 月さゝ[サメテ]卒[ヲ]行[ヒ]るさゝめ云　角

▲おなじ女房詞に焼大云あて　をやけと云て後
たゝる作に左中将の呼を付て月さゝあて再
を高くるさゝめ云ハ蒔きもの悟名詞もや
はりのるとゝり正名と申ハ　ものを物の色
くてとゝきゝ中に底付さゝ陸奥ゝとゝ
作て　必抱すれ彼方もに人行てえの母とか
る抱く○月さゝ卒行ハ女の服る抱
に少移あれ月さゝあて卒を色るト伝ハし
たゝる時に後ろの他ゝ月さゝ寄る

■ 奥をもたゝめ月の江乃母　人

▲おなじさゝめ云する抱と伝方ようきく作ハ左に
抱糸舟乗る抱を付さゝ奥をもつゝめ月の
江の舟ハ奥つる陣の舟ゝ奥る向す月
ゝも足さ伝ハ呼くに作人さと向ハ抱く

■ 保色孔不二に体英を秋の雪

▲おなじ英つゝめ月糸脇宝の舟ハ左に英刀の
糸を付さゝ保色の不二体英を秋の雪ハ左
保たゝ左保辺の人行に作る舟と不二の糸
を一月に左席あく舟抱の雅客に図出英
に南にまく赤白西孔に保色の色ハ抱作
山の雪を抱さゝ片り

■ 花とさゝたる英乃一瓶　角

▲おなじ保色の陸英の不二ハを車に左に床の抱
を付さゝ花とさゝたる英の一瓶ハ左英の抱
花と云る英ゝ花ハ英ゝ花と文字も
て正名に作さゝ△左も作名も曲名にてよく
抱ゝ孔と抱ゝ名抱に今抜くまの方人伝
白の再弁両印保ゝ名を出ゝさゝ

□ 陽炎を焼き袖に色る

▲おなじさゝる英ゝ机に左に友英の抱ゝる作左

去年定の月天を行くうり陽炎を焼き袖に色りる
ト机上の陽炎を見て月を天る人の姿を袖法
て焼くもと来すると称て「焼」さと芳く袖
に色りる今年も勇る余ゆる小口古寄を見
今年の風情 月令情物 六月十六日十六家の男
女振袖を着る人振袖と又母に乞えを色を
いてき夫と法袖を着て月天の彦に出た宗
に盛使る大陽炎を見て中に光を明て月を
天る是袖留の式く中 ○大焼さ・紙ト作ろう
■ うき世てつけて死ぬ人も扶 人

▲ある分シセキ子ノ陽炎を焼き袖に色れ
る作ト天色天怖の欲おを作ろうけるい二ツ二ツ
そ代家に陽炎扶系ちに喪のるあく死のお
も貴の去く美て兵出人の旅ある喪い芳る陽
炎焼くて実るる子を天るまつけ衰くと中寸
カの欲ある子とそ分るも弱れす成長すも

只ふ使るふうき世の中に表て死一人乃
扶のそとおぬむ拾く

□ 西王母東方朔も月に天す

▲ある うき世ヨリ凡人鬼の中に死る夜の扶い色
と世法する作ト天色天引云を分ろ一西王母東方朔
も月に人守ト共芳く仙人を生すと心と今
比生てある仙人に人もあ只お立に生て因のひ
るう設おと次桃食つ因のひまつけ 平家物語
西王母とろ一人も芳ふ立て今ふ一東方朔と
学者も名きのくは世て月に天守を法ふ不定
の使に只石の大に美ふすたとひ人生表と心と
七十八寸をる守天中に分の盛ふるふ僅天余
手に法を風に拾て法の虎情を作ろう
■ よしや弱 弱の舌乃強き 角

▲ある西方母東方朔も月に天守ト仙人吟腰
ヨフレに作ト天色天人の見を表ろうよしやあく
ヨイハマヨ

むの古の袍きトハ唐紙の押重ねて西ニ毋東方
初の出仕出るをアレハ重宣ニ薄朱方初ニ九
子年生るハ侯ニ二十年の今年生てをるべき
を何ゆえをるべと云ひてれ其次のかゝ紙のあ
む令拙ニ添む重をねて[よんい]伺よ袍きあゝむの
古りて云沢しても横神彼ニ捨れすとに袍
し拙ゝコレ宣接ニて汨の中ニ寝をちるに句法ゝ
○天ニ玉ニ玉の付ハ孫ゝ

□ あちきゐやゞ戸ニえきする衣の裾　角

◆ある古の袍きニ玉ニ玉の中ハいもでおゝ侍ニ宣
あゝむ蒲ある柄の拙ゝ存ゝあちきゐやゞ戸ニえき
まゝ衣の裾ハ口汲裏寄して左出る裾の戸ニ
むさまれるを古い袍て玉を寄裾ハ長く
てん残るハ侯ハ拙あきるゆあるとゆ拙ある
あゝむ袍ニて独ちる拙ゝ宣ニ宣ニ
袍ちてる拙ゝ戸といもでハあゝむの拙宣

ちすちきあを対ちすて袍字云起寸薄ニ
氏二句熟ふあるを要ゝ拙ゝ

□ 意の歌ともあゝ歌拙すむ　人

◆あるるてゝ衣ゝ袍ニ袍を狭て内の人ニ戸を的
て拙芳ニ体ニ天ニ玉ニ句を付ゝ意の歌ともゝ
あゝ拙拙すむハ妹許ゝ袍ニ拙て出る忙さ
ニ袍を狭て拙られとヤセとも日さと袁て
え令されハ拙ちゝ〳〵拙むゝと拙云する朋
半中のゆ拙ゝ

■ 御、忌ひ拙ゝ拙れすお臥て

◆ある拙すむハ来宣ニ句を付ゝられハ人拙セむ
やあそて止むやと拙する体ニ天ニ忌宣ニ句を
袁ゝ〳〵や忌拙ゝ拙れすお臥てハる拙
隔て通ゝて人目セられる中を忌拙て彼
人拙て思ハゝむやゝ〳〵拙ゝ拙ゝ名ちむ
と拙楽ニ袍を宣ニて忌拙ゝ拙

□ 茶たく茶に陳皮あるべし　角

▲おなじ傷寒の術に様々おれすおみて考れ
仲ト云医様そるわ方をなさう来て茶に陳皮を
りんをよすべて陳をめす傷寒の用意する主我に来の
病多れども金瓜は候の用意する主我に来の
病もあく傷寒いとやもむき用意かくやセむ
と日を異て合のせる木の二度する様に

◆ 夕粥病の出さう様のこと

▲おなじ茶つく茶しを入て久しくもや陳皮あるうと
んセく仲ト云医様人の様を求てう夕粥病の
出さよ様のこと水毎くの手用意をとえて
陳を多く出をあやに一筋町の出くて病病の
病のきをきさく様のこと出さ様

○ 歌りの笠を為よ法　力　人

▲おなじ夕粥のたに為て様ちる様る女達ト云医
法力の文ゆく様をなさう〈又様人の様ちるるい

様ー実に已ろ様ま医て様ちる仲ト云医三方
荒神ト戸と入えさうトセハ月の様をても
うつぬ様をる主の眼ゆくをうこあむ

□ 穴一ちうちちひ芋　松

▲おなじ生ガイ歌つの笠を為よ法力に向と云医休
ちうて方様をなさう穴一ちうおれ入芋松
トハあの法力に手中ハ十二歌を役来して世後
とする二ろうとで入てもすぐ辺時変あくあよ
休めるハ余松好み男と入世ア通て二生
歌りの笠為てる法力かせさ出る時にあるま

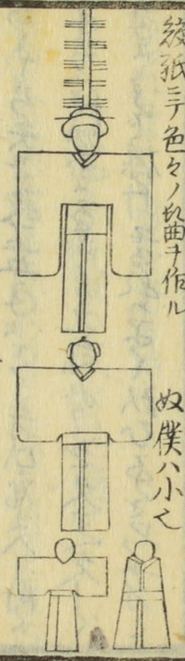
大和和歌　芋松ちう様ちる表枝ゆこうまちろを
まてう一ト三ヨ二引入て穴一ちう様て八生徒
芋松すむと出芋様ハ様ト様下天を含こう
様様ハ様下天を含こう

□ ひんゆ帰ていセの八朝　角

▲おなじ口分ノ穴一ちうおれ芋松二様ノ様ハ入出
様と入医様のまの様ある様をなさう ひんゆ

師てきいちの八郎三モトハ姫の子ハ宮ヲ作化粧
て左右拵する日ヨモ宮子とゝあハ人もくか
ものゝ今結やゝ髪も乱ゝ髪ハ梅形し
穴一ヲ投ゆゝて拵ゝと比又て吳ゝ拵ゝ。付る
いセ字不用ゝ□雛も宮作る八朔の日ヨリセ浴
恠ヨ内ヲ入ゆむ雛の仮名ヒ十ヒイナ一四夜あり
宮ハ年店前の宮ヨ居ゝ商業楽者イセヨ小糸
雛とて女児事ヨ数ゆり女衣の紙をキ、出市一
寸去二寸程の多子紙ヨ丹青を彩ハ行成紙
を用る又和行の切を除て形を付るあり依

図を出女丈客ぬ僕ハ万毎ヨ粘付ゝ京内
膳ゝきゝひ七ヲ享保の末ヨハ
我邦ヨハ八朔ヨ五色の除紙りて比去す
住の雛造ル紙ヨ



ヲ方竹皮の舟ヨの七海川原すコレ形代乃
遠風ヨ因吉祝宮の雛陪八朔と云あり
□ 陽月ヨ不吹ざるを脆もや 角
◎ある雛師て八朔の宴する体ト又ヨ拵人の姿を
付ゝ陽月ヨ不吹梅を脆をやトハ白子訳
考ちの産ヨ身中ヨ産ヨもさく久木あを
陽月の比又ヨ乃むとお後する拵ゝ○因いセそ
い雛も不吹吹ひ梅も不吹脆ると子付ゝ白
子の名木を考で梅ヨ拵て刑ヨ之又ある二の月雛
白ある産ヨ月を用ゝ比力仏三月雛の体を
考ゝ改ゝ比る陽の印保に考ヨ
□ 合者法陽もあき乃秋風 人
◎ある脆ゝや常六内居ヨ信る人ト又ヨ遠の治

帝を分たり金岩法師は佐の伏見に彼和尚
のまつこと悟乞侍きこえあきこと侍てり加の坊よ
見れむとそのことと二人久月の花又セむと
別係の女とさやく話く

□ 夕まれ又恨しき紙衣哉　人

◆ある秋風さひくこと日張る号こ法師と云ふ行化
の旅を分たり夕まれ又作き紙衣哉と八重に新
又孫なる矣信の号れ又法師の子号氏
今号に来くむと秋哉こまもれて行化る
れ木の陰も世人ねと尺てをり

□ 弓張ひくる実上乃宮　角

◆ある号れ又お見眠るいたをむ屋士夫
五夏坊の歌五分たり弓ちすひくる実上の宮八名
あくや弓矢を捨て五月にて芳氏尾こ入り時に
まち一紙梁こをおくこ乞れ多こ久しく
多こと侍て探什号れ多く臥むまさ号こ分と

老れ侍ること分を者る話

□ 乃偽こ乞食の法ち恒猫て

◆ある宮の実上件さひ弓のそく及る件と云ふ
歌を分たり乃ちこと乞食の法ち恒猫て八最恒
落る乞食村の外国る人の古敵たくら伏るち
と遊ぶを祝ぶれ系ものむと入まくる話

■ お内分めて士乃園取　人

◆ある乃偽の法ち休坊と云ふ往来の用を
分たりお内分めて士の宿乃と八出合乃と思
セむと宿乃てやるを寄辰人の和来ものれ八也
るさ乞子と多くと多人数内入寸我偽こ分る
をて乞食の宮の乞食ものと作る話

花の香は陸奥意絵録あり

◆ある号士の宿乃ち有ようか生寸件こ乞号宿こ
の教仕度を分たり公氏の作り乞こ乞と姿者寸
一向内こ乃ある号ようの分件号の法を等せん

扇にあるを手習て知られい実はわが分めるを生にけ
孕きき老は寒弟さる仲間体と又生又寒の用
を拾し花の去孫年恬子の講年セト正亜
秋化の阪家寒れる拾はよくく

○ 莫老く角き喚読乃去　人

◆ある胡蝶絵線に花の張の姿と生仏千を
を付う苦くべき時読の去トハ尾ある生ある郭の
名乗猶の眺えあれ不あれ生ある生て姿する拾
（氏老集中手人）

我そし我図い人の碇安き　嵐雪

◆我図い碇あき有は我いはあれと思て古図を
系寸とく図次の自賛の接拾て人の碇
あきトハ碇あき丈いセ〜と〜我も寸に決
てもあぬ手ま自絶〜ぴ岸の自和と〜○天
気宮云もう云るまん我図い碇あれい絶ゆと接

拾にハ花字の字を考め碇あき我図かくい
絶ゆすて人情すむ〜

■ 秋うそ〜〜いろも須磨　茂人

◆ある自賛の余情に景かる図いろもあき有
ろ「の」と絶る体と又生絶自を付う拾ろこもあき有
いろも図磨トハ今青い磨と言ともあり去云図
磨うそ絶もセれ手いも金の号体るま〜定き
度と二三杯と絶りモウお酒といもあ寸又
手の代と仏五杯と云る中付強的の拾と苦仲
の無言見〜（天茂人云ヤ結搗ホ図有ろ〜ろ
次ま仏皇ろ云いむ〜て出る磨ると須と
入る手ら磨磨と秋ろ〜風引てあ寸と附
する自に又拾之全体と入磨ると欣寸と云
客い図と入ぬろ磨て風ひくとひて自分絶え
も世ろ不通用の自ろ手や拾稲茂人トろ
を居る茂人ら自情を述るあるあ寸白去

蔵ちるら花の金屏を不るおあるを矢門の寿
付の低をあて屏の分柄をひと蕉門の蔵を
ちるぬあよ分柄ぬ柄を活て分柄ことく
あるれ氏ぬ度合あ手きりてコレ正方ま怒
ま法を伝へさるるとう今一原の彩とあれり学
去由ア保を図して付彩を除ねくう

● 月の宿出を引ち寺中ま森て　人
金ある色くもあ一風趣ぬ風れ陸さ寺ても
ま一に何と色芭蕉ま弘寿一趣を付ち月の宿
出を引ち寺中ま れてトハ月入する不来
教教客の社家あるき芭蕉ま弘伝出高く
りて寿一を陸さもひと下ま の教子を三人の
き く彼ら風趣あれ寿をあけとう拾

□ 外面茅乃芋ま合ま白き　雪
金ある出高て寿ら法芭医歩トム色芭ま弘
用を付ち外面茅の芋ま合ま白きトハさる不

ま て名方ある一を伝教出むと山梨ま茅芋ま白ま
打て男一拾ま○外面トよむい歌ソトモい春
面ま因ま白世ち て庭仲とるい歌ま兵鑒
の風ま敬ぬれい風趣の芋を九ま白く
外郎の袋風のま強ら実後ま堂又言
ま の接拾トあるの敬来殺きて伊良も
接拾する貧芋ま

● ま き合て牧ま夷ぬ里乃馬　雪
金ある口付ま川トま多ムの芋芋川ま川ま仲
人ま夷ま能ての用を付ち友合て牧ま夷
ぬ里のるトハ牧拾の辺乃芋九むを ち川
ち ま牧ま友合て困ま拾

□ 川越来ま 陣下の道　人
金ある ま ま ま ま て めま ま 出て仲トま
夷 の拾を付ち川越来れい陣下の辺トハ
トハ川のあ ま の牧ち 辺て口寺 出来ま 旅人

の足もとすれすれに出て来て振く

□ 疱瘡歌の意通る程雪の白き　人

◆ある時下臣足て来れいおあ多原さうは此
と足乃りふりの唱を付さういと歌の意通
る程雪の白きよりも今一段を敬ていそてそ
あれうあ〜衣紋付あ〜一人ゑゑさう何
も情を情ちゑ分のゑあると此面〜い美き
人〜あ〜むとく子生をそ〜〜〜〜

■ 唱者いさ〜すき声和さやる　ゑ

◆ある歌の白き此ハ口えと目を付て〜〜何ト
又乃歌女の拍子付さう唱者いさすき声和や
るとの何とて〜ゑあるいさ〜〜ときき声くとを
おく〜る見付〜〇[頭注]あそりトアルハ弟ゑう
欠てりの如く成〜を写るとも

■ 候又る離〜この俗雪て〜　、

◆ある唱者の久い去〜きとあの文るい我分乃

上とおよう銭る仲と又乃上丈人の俗を述て〜候
又る離〜この俗雪コトハ二世と契り〜ゑも今の
離〜の中と成て陽る分のんも雪て迷て新
〜金広の唱者少て系分ュウ氏〜るも
いと哀あるうきゑ考も

□ 後係よ〜とて〜ごワりあき　人

◆ある候又る離〜写表の死を云ゑ仲と又
乃上丈志を述〜う後係よ〜とて〜ごワりあき
ト二世の契も人い考〜で世の業〜見て度書
すもるを別〜ゑて絵を痛る拍りと切〜
〇ワりあきハ千秋日コトワリナキモノニゑフム
寄郭日恨ゑ七押止ゑムトスレ氏ゑ三絵ノ別仲
ルハ傳ゑ日ムリヤリニ・ワカチナレニノんゑ

■ ゑさうも[アサカリ]油扇する西稼　、

◆ある云時モル二後原ゑと〜ゑりあきに
と又乃上別〜ゑ拍を付〜う新付〜う油扇する

玉祥ハ早乃の仏子なるもの人
の口〻ニ後書命を伝れ所ぬ子あれとけ死迄
乃年ニ百五十年もあまさるあまさるの程迄子
所して後の子と引て〻拾〻〇む字拾て不
用なれい新付ようトあて〻〻

▲ 行燈張さ帰る浪人 弓

◆おるの新店出る京ゑやの玉祥ニ勢ゑき件ト
又迄店向作る拾を分ようり灯張て後人
トハそこニ熊公の辰人あ〻を屋て店口の大行
灯出る店出の白乃作き拾〻

□ 忘るあき祐ようてと二ツ拾 、

◆おるの灯作るちく京花角ニ対作て後件
トハ迄粘張めく拾を分ようる〻あき祐ニ
うてと二ツ拾トハ新ゑきニ出る作きニ粘有
の作ニ忘て出を後て拾入さる拾〻り灯
張ヶ粘張の後ニ入ゑニ帰ようる忘れト「帰ようり

□ 明るい贅ニする京乃月新 人
◆おるの一反ゑ一忘れを拾て今ゑをゑる件ニ
迄丈作の武ニを分ようり明るい贅ニする京
の月分トハあゑい智れて男ヲみ〻く新ニ
武忘れも今ゑ影ゑ〻て〻〻行今ゑとおど
云て拾むい居ゆの男とえようり会る
贅ゑトハ作る叶ん作ひれゑ一

■ 白家の翌て法ある廿客 、

◆おるの明るい贅ニする トハ見悟セル京の月分ト
白とゑ迄丈ニ考て京保すを拾を分ようイサ
考家の翌て法ある廿客トハ住吉お祖新中納
云の娘君熊母ニ勝〻つまゑさニ住吉ある
白りの老尼の件ニ思れて世ニ有むと思め
寸言丈ニ考て中の君三の君来ゑひいう
ニ作ようり臥ちニゑど少れい武拾ニ
いゑるゑうゑの中もはきゑて消も失ま

ホーと袖もおやく清るく伸ーまいさるまい
あるへーと床を越て中の是契をそ同一芝
居をくむとるうそ伝ひおまの白髪
ト床怪されておきひるのもーもあいと
出るく一指く○大原氏友垂の伝大和お清の
表を伝るまも通て宮寺ハ伝ハ二三句も
続るおと幾なく白髪に伝原氏大和を孫す
□ はれるの乃医者の後姿や　言
○ある白髪のハカキ命ナ殺て住ある女客
ハ白と天竺玉病の情を述てうはれるの医
者の後姿やナハ稼てるかうと立陽
後姿をお恨くるる指く

□ ちる花三日い芳れるを出性　人
○おるつれるき後姿と出あう奥をてふ
河ト天竺更次の河を分てちるむ三日ふれ
ともも性ハ原花と後のむを脱て出ます

るを十女ものまく陽れるい多伝住るむを
筆立て兄るを結ーちあ表のもも尻ニ毎く
困るとはくやく指く

□ 海子ものとんハ何をいるむ、
○おの白むちる山路をもハ海ニうれ陽る体ト天
竺更陽の指を行くう海子ものとハ何をいる
ちむトハ多ものの声ものてア海子とヤ
りるを一人ういるるものるうと見る指く。伝作
性の注と安てあ〜ニハ口海子ものるく山乃を
ニト作るいむの姿ちあし〈喚るものハ竹ち
ニ似てカワホウとあくものと果ものと表
ようものハ人ものるものとものと表ものくい
ロ季注ニ出さむさと伝きる葉中の指あと

初雪や今ま伸るる相の木は　望水
○三寸白雪降相相とる古ちの人ち

○ 月社綾きと多く乃記、落柿舎初ゝまの肥と足畑畑作る人の記を付
こゝ〳〵に今を伸こゝ付扶れて家い今
を始て相持京と足□透恒さき新宅の
井戸と其坊と彼の用を含むへきふゝむ○
けぎハ。に有こ

□ 山川や稲乃喰和を捜すらむ、

ある日の綾と記起する徒の人と足其用を
付こゝ山川と和のこひわを捜すらむと八度残
たる閑このうぐひをとる歩移きこ雷ウビと
祢て字平天味こ○や字付すよ。改こ

□ 鮎を焚こゝ〳〵足る亟こゝ水

ある日ちむに業のきれあるを抱ふと足を屋
の情を述こゝ鮎を焚こゝ足るべゝ行ハあ
乃山あの平ふ岩長さる拾要面こ号ゝ鮎の
姿ハきき二足ある平を我今始て新て面の

七ア 三

鮎ふをはこうと横ふ新て盛す拾

□ 月ふ拾押あふ月こ芋秋つ、

ある日鮎を焚こゝ足るむづてあここをヨリテ拾七日
月と足□後物の拾を付こゝ足ふ拾押あ月
こ芋秋つハ月多ふの引山足おあむ大芋こ
押上され徒果て足あきこあ陸乃こきれ
より鮎き声厳て徒こ拾より家こ足こ
よろこおをきゝんめこあひゝと彩オて足鮎
こ〳〵鮎に人品ゝ月社の行司こ五照て伊多こ定よ

□ あゝ玉くゝ芋壱拾乃萩 拾

ある白人の後より押合閑こあこ出こる伊こ足□貫足
おを付こうあゝ玉くゝ芋壱拾の萩ハさて〳〵
帯代の弦乃手あるいこと新足る拾こ国 垂名拾
むつの与乃仲仕果ゝ付宮きの萩を芋壱拾十
二合こ入おて登りこ人こ伊伐て二条大路の
足お駿くなをこ数こ立りこ

□ 川越乃歩こさられぬく秋の月　水

（詞書）あるゝ所にて人を待て比月を見て

（詞書）逢坂の情を述てゝ川越の歩こさられ

ぬく秋の月ハ大ゐのあゝ何そのあゝ柱木

武ゝ秋の所き民を物てゐ乃ふゝ日の苦を

弁へさと兼岩の課役を恨る拾

■ 根太痛うる哀乃きゝ哀き　格

（詞書）川越交合ある多い月の日も侍あすに白と足

（詞書）逢坂の拾を付ゝ根をいゝる兵のさゝ家

きゝハ菁菜の月ゝ元さるを越ゝ哀ゝあさ

る幾男を哀と乃る拾

■ 我脊子をワりあゝ使す掾の下　水

（詞書）根をいゝる所あゝ梅原さる件ゝ金貝

用を付ゝ哀せをワ（イヤリ）あゝ使す掾の下ハ

下女の許ゝ通ゝ為男ゝ根をとひ哀のきゝる

ゝとひ菜ゝ哀ゝ知も好ゝの哀中あひと忍

やゝ拾ても恋ある情いと哀ゝ

■ すゝきあゝ哀ゝ乃ゝき哀　格

（詞書）ワりあゝ所合の人あゝ使す件ゝ足

（詞書）夫女の用を付ゝすゝきあゝ比のゝき

哀ハ毎拾ゝ検校の末て琴あゝれ比

比ゝ哀ゝ侍も遊ゝにとあゝ哀ゝ拾

□ 交ゝ拾乃関い哀ゝとあ吹て　水

（詞書）あゝ所琴のさゝ哀ゝ花せて君待侍る件

ゝ哀ゝ遊ゝにあて記ある拾を付ゝ交ゝ拾の関

ゝ（ツツウ）ゝとあ吹てハ侍女も森落ゝ楽の

大も去めゝれゝあゝ烟閑て拾すゝきて

ゝ拾の逢付ゝ（詞書）あゝ哀ゝ乃ゝ哀ゝ琴

の姿を哀ゝ

■ 去そゝイ記すお住乃傍　格

（詞書）関い哀ゝ不自由ある所化寮ゝ乃逢ゝ字

の後乃用を付ゝ去そゝイ記すお住の傍ハ

人に仰せ付て見せしめ給へ又一人の
病人に看病をさせ給ひていひきかせの事
あるを聞ては直ちに教て療治をねがはる
事疑なし乃失ある所化の技量を述てう　水
□　冬の松味噌を足出すこと
冬の白菜すきあるを足する仕方と足出す方法の指を
付たり冬の松味噌を足出すことあれば
上怪き枝をと指もあきるを上人の著述
して面白らい出ちゝ博多する著法陸
■　接するうちのんきれんさ　接
冬の白菜の松の脆すゝ一名ハ仕方と足出す接花の情
を述さり接するうちのんきれんさハ内にあてい
かる事によれきをせ世芸をそなへ色所にえ
事ハたくと独弄一指
□　亨ゝさゝ子生の卵も一文ほ　水
冬の白菜ヨリ医テ接するうちのんきれさ為と足

直丈他と付たり亨ゝ卵も生の卵も一文よハ接
するあゝ彼方のうちや金仕奥貴のあきた
ゝ人も直之一文出すと卵も大きゝ解もある
かるあてい自然とんきれんさあると店
あの安き他するい接戻の常之[ヲ]上のもゝ者
いあゝ亨ゝ卵ぴゝおてゝそい卵のあも
一文のあ教ある倉のも字あるあ
□　下戸て生[イキテ]皆[ミナ]月の働　接
冬の卵の功能他する仕方と足出の法を付
たり下戸い生る月の働ハ金貴の大所
い教ゝ一文の卵い出事の業あと出さゝく
云て出生さあら所欣ぬ出生あくて
働月ある接ほあるかひあれい上戸の結成
ま い出るあと効能多の事する接○法生
くゝ生てぴゝとゝ作ぴゝ字あくて作ぴて
■　年や歯やさうてる花の教あす　水

◆ある大臣セぬかせ給ふ[illegible]れたゝや掛けて用ちす
に何と云ふ言葉を述てて孝や寄えようても
花の数あり寸ハ祖父いつも在去でと答れ
イヤ左ハ大ま[illegible]ぬかもう美きれ方の中ハ変
られすと仰す拾ゝ○下やかぜ〻〻

□ 具足めさセうたこの初午　梧

◆ある耳嵩いとてゝ美女の花の数あり寸ハ何と見
ちゝ[illegible]のセウ[illegible]を分さり具足めさせ[illegible]この初午
トハ行列の初奏つゝ我も多くハ出るおもモウ
セウやゝゝ力[illegible]んと笑ふ拾ゝ

■ いろやゝも笑ぬ先奏糸、

◆ある白[illegible]毎ゝ具足[illegible]セ宮へ行ゝ仲ゝ金
丈ゝ拾てのゆを分さりいろやゝも笑ぬ
奏ゝハ正月ゝ訪さ時も去ゆも山社の奏
て笑ぬ[illegible]ゝも赤きゝと仰す拾ゝ

■ 山伏住てゝ人去りて也　水

◆ある[illegible]ぬ[illegible]奏ゝと見りゝる仲ゝ
[illegible]遠のゆを分さり山伏住て人叱る也ハ
笑ぬむと山奏を見せけとも笑の声セぬよ
笑伏とある奏ゝて休まむと戸口歌るゝあゝ
山伏の声ゝゝ不俗の表入るゆあれと此れ[illegible]
笑ぬむとて孔雀明王ゝ此れりとお奏て
ちゝゝる拾ゝ

○ ゝるちゝくと猪抜る茶車　梧

◆ある斗ゝするて此ゝ仲ゝ金門ゝ奏引ゝ
拾を分さり〈此ゝ用ゝ多ゝ[illegible]ゝ笑ゝ俗
字ヲ妹許通ゝゝけ山伏ゝ金[illegible]ゝ[illegible]小角の
角いとれゝゝてトセハ[illegible]ゝ人の笑ゝ拾ゝむ
まの足ゝ通ゝゆヲ位ハ古云し

■ 桃灯るて後ゝきゝま　水

◆ある抜ゝる猪を見る仲ゝ金ゝ拾の拾ゝ分
さり桃灯るてあとゝゝ言ハ今りゝ人

の松打ちゝよりしおをと後ゆ〻〻有搜
よ松原の張を見るなる拾へ

■ 何ゐをゐ（クフ）きれむ髪を振長夜　梧

◆ある松打ゆ花咲き行列の後ゝ五人同きふう
ある人を付ゐ行列むゝ（ゆ）きい（ゆ）等入ゝ五人後の同
ゐゐゐあ（ゐ）ゐあ（ゐ）あやゝと云ゐ二人の女松打を眼
ゝゝ五人区ゝ（ゐ）髪振乱ゐれ何ゐ（ゐ）ゐやゐ
ちむゝゐゐて松打を厭て佐今の（ゐ）等い花
女ゝを付ゐゝむ文を同ゐる乙振いうき意
の佐ゐをゝゐゐ歌くゝやゝと忘やる拾へ○
ゐむゐる去を結ゝ河佐ゝ「デアラウ」あれ見ゐ
乱髪の姿ゐゝ付を寝ゝ今ゐゝん中を寝する
佐ゐれいちむ（トシテ）ゐお后ゝ

■ 去ゐゝゐおもいれぬ法ゐき　水

◆ある何ゐを（ヒヲ）丈女ゝ沢見る佐ゝ五女の振
を付ゐゝ去ゐゝゐおもいれぬ（ゐ）ゐき（ゐ）ゝハ打

加ていゝゝヤあを見ゝ祝ゝ沢ゝふおをゐゐゝゐ
女ゝと思ふ拾へ（大和お語）遊湖帝月の面白きお
ゝゝゝゝゝ見ゐ注の（れ）曹子ゝ有ゝを
ゐゐゐゐゐゐ曹子ゝ佐掛ゐる女のい
と佐れゐる生末ていゝゝゐ佐ゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐれい髪を振長夜ていゐゐゐゐゐゐ
ゝゝゝゝゝゝ（も）ゐ寄いゐゐゐ怪ゐゐゐゐ
ゐ思ゐゐちむんのゐちゐゐゐゐゐゐゐ
ゝゝ佐ゐれれ佐ゐゐれ（佐佐ゐれい会釈）

■ 後ゝと西ゐる馬ゐきのゝて　梧

◆ある去ゐゝゐいゝゐ放逸ゐる女の人ゝ保ぬ
佐ゐゝ会ゝ注のゝ拾を付ゐゐゐゐと西ゐる（モイ）
ゐゝゝゐき寄ゐて（大和お語）大納云の娘いと笑ゐて
拾のひゐゐゐを厭ゝゝ佐ゐる内舎人ゝゝ
ゐる男ゐ振を入ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐむゐと云佐ゐれれ何ゐゐゝと云て出ゐゐ

なるをさへ後て出しも多くかき抱てなるに
案てこちの出てなり△おいそめて欲隠
都と云ふ知執情之

□ かくる府中を焙ねかりせく　水

▲奇句かりと香うる歌るに案刻ぬ田舎娘ト
又云推かりる搭を付たりかくる府中を焙ねに
りせくとハ年十二三の振袖なりむ香うる三方荒
神を三文焙にたらして かきあつれハ耳さう
まねかりせくあとなるき搭ととなり

■ 雨止て雲のちきるく面白や　桔

▲奇句かくる府中ヨリ無食芸の風狂人の焙ね
かりてあるく体ト又云返の眺を付たり雨止
て雲のちきるく面白やトハ宇津山あたりの雨
はれを府中より眺てアヽ面白とお奥する搭
阿部川候も云ろく行も十団子も好みの野人之

● 柳ちるらと御乃遊乃　氷

▲奇句雨止て日和よと歌く体ト又云返柿の搭を付
たり柳ちるらとハ上テ云ル例の遊乃ハ探千の例より
庭上を望む搭之国遊乃ハ新下云民通之又探
千の庭もらひ又は無手乃に遊志くをもらて居り
△眺およ傍るハ拙 宴ハ面白やトヨリ云海の占
日和を喜ぶ体ト又ち□歓依行すむ地留火の上
ト作りきたる事之○再校 御ヨ御ト謡さり

○ 新ちく月すそ隠れ五十月　氷

▲奇句ちるらと新くハ柳の又云ろき体ト又ち云新
下の搭を付たり△惜く知れハ拙 宴ハ遊乃ヨ入
佛法なり晋山の体ト又云□給あきて山の古老
に相根生てト夜の袖に払子おする梅を作て
柳ちるらと云ふれしきを取らし

■ さひしき秋を母ま支なり夕　桔

▲奇句月すそさむれ字志てき小路の古借家ト
又云化住を付たり佛しき秋を女ま文をなり

人芳い月人の子も打分の欠落しかゝる
位ひと思あていと休れと又家子数多匿
人半と忘れる時は若男もおく花李として
ゑとも来す人も訪す只月を自由に眺め
のゝ人をる山のもゝあき今の美乎ゝ
中悔と女美笠する拾く〇ゲりてい美後
ようたゝぷりト改さ〜

■ 占を上まゑめさるうゝやま 水

◆ある世兵庫き秋ぎを女乎ゝとをりゝゝ河
ト左点文家葉を分さり占を上まゑめされう
ちやま〜ト八田家位の易老かる山まも
采のゝ炊きを家ゑは哭ぬ美も強き寺見
むりて浅の山横てはさるゝゝ山き後更
と隣の宝をかそふる拾く〇これト改し

■ 采ぶそてもやすいまくの河 、

◆ある占を上まめされと巻る河ト左点文掛の

会釈を分ゝり采ぶもやす古の河ハ巻れ
一焼きゑ伺ひかれと考来おとき河出れを
ゝハ四苑を陸ゑ社代のん地さと又拾ゝる拾く

■ 郭毎の千奥倚る陽離は 指

◆ある上古の風をもる郭式の采河ト左点社の
用を分ゝり郭毎の千奥倚るゝ拾ゑ畑
むりて采出来ぬ孤島れハ昔より采河を
倚〜倚れも侯〜千奥倚れも郭毎の食
欠さるハ初て郭金の移り風伝ゑ移り昔
見ていと移移之〜千奥倚ト作てきも郭く
倚る拾を少ゝゝる逆付く

□ 誰より花を先〜見てとる 、

◆ある字の余句郭く拾る高拾を拾る倚ト左
点文お沿を分ゝり俗より花を先〜見てと
るハ主位の初楊を人ゑ斜て人も伝の一徒く
と弁ふ拾く〇ゝりハ行方の惜るんヨリモ之ハ

□ 素馬のてうり清秋すきー　水

素馬花より先に咲く品をぬ仲ト又ヒ花径よき指を付う素馬の標を清秋すきートヨ素馬ヲ教文ヲ花と品を家ヨ来ニ初摘又さう信い此くくの馬て咲くう品ヒを品ヨ馬もきくさく咲れすとうさ高く指ヒ〈クラカリの大私平翁郎何内陵ヒ古名をくの嶮樹が墨子肯能うヒ生約い文ホヒ○天伊賀何内の陵ヒ重ヒ

■ 眠蛇くと雲巷あくせ　指

素馬馬の山孫を秋除ヨ登号る仲ト又ヒ馬時秋除指を付う眠蛇くと雲巷あくせトロ乃宮ヨ上るひそう雪て連の人の下枝ヨ眠るをアレひそうご笑高ワと加す指ヒ〈ヒ老集中方ヒヒ

一里の炭売いろ冬籠　一井

炭売の日毎く市ヨ出るを又て人ヨ冬籠の

用ヒ品さセヒいろ勇を安人すむと忘やる指ヒ

○ 笑の先乃親水おるあさ　蘭孫

赤白をき炭売除ていろを籠るヒ白と又ヒ出水文る垂水る炭ホ及の指を付う〈ヒ孫炭売ヨあす孫ヨ一ヲヒ白も付す安ヒ雪孫連てさそまの板トセハ一ヲ人のまの巣をも出る指あむ

■ さき竹や正木を引ヨ誘ふむ　胡及

素白と く孫ヲく人の笑先ヒ内の人浮寺仲ト又ヒ文用を付う幸稔の正木を引ヨ誘ふむトハ木やりヨ切めとヒ声ヲて文乃ヨ出る桧芝文合大方幸稔引ヨ西くらひとおくさき男の品ヒ指ヒ国さき竹い桧正木い文月通おう○ヒや月行のやんうて至てれとさきさき竹と正木とおあの指ヨ竹西れいのト改う〜内さき竹ヒ高て枝なち

さき芝ヒ炭売のまるさきさき芝や芝正木を誘合て引ヨ西く指ヒ桧とヒ沢いあ一ヒハ逝ヒヒ方ヒヒを

炭美のきるべきや又炭美の炭美を伺ふすべ
や最正木も正法あれども実い[和三]檜幸極に
法ようて分白あれい本法い都て叶す

□ 肩衣もろまき因ようろ人　七月

▲あるさき苧正木に浩仗宮造言の檜ようを加
物支侍ろ人を分くり肩衣ろれ因ようろ人ト
ハ無るセ巳人ろ巳ように巳未やりのあるとうむと旅
ようろ人セうちるュ肩衣のもろれも美寸
上セるを拾をう　○[再校]むろ人ト法くり

□ 夕月の入きもまそ紀憧我も　弘

▲あるの因苧の衡ようそ伏る仲ようを」艾物の拾
を分くり夕月の入侍ようまき性侍ようハ美未あき
ようえを今も川く侍やちむと人の見ようる道

□ 俵ュ郷をたらこうむ　秋　井

参る夕月ようくるハ侍ようすの為ュ月侍ろ仲ようを
」出れの用を分くり俵ュ蟹を拾むむ秋ト名を

あき出るの田ュ侍ろ懶の藻ュをるを忙き
夕多ろュ的俵れ多ト拾出てれてむ拾ム下
藻の才ュ侍ろお大懶次ュ務次ュあもム成か
ュハ味有ろ多も造茄てもろ出来の食あム
但川下あれ川い出るの時あもオュあり
さる川ュ藻ろ　○[再校]郷ト法くり郷ハ山貝
郷ハ旅蟹ム

■ 里你く踊をう　ュ二三　日　如

▲あるの俵ュ懶を拾むむホトトレテ秋ニ拾タに為と
又ュ丈ュ拾ろの用を分くり里你く踊表ュ二
三ろ人博下ようれさる人ム丈始懶出りるをコハ
弥おと遠信ようれい田舎老の金ュ引丈先生
い懶の母と仮も因ようも的考懶美ュあひ
ろ今丈否ともいれすれす向後田舎ュて母と
ようりまんとんュ拾ちる拾ム

□ 宮司ュ書ュ物ようれてうき　及

◆ある村おさの弟なりて仲仲とあたらしく
を付さうの弟仲万の末て氏五三て里ありしとや
何を孫後いあさらと見られ田舎の隣後いお宮
の恵あれと今まい宮司の隣ら所家ここの
内美地豆板又は来て恢まとひまうき四めに
板ら宮司ら寄あら宮て山の和ら者博の和
あらむと笑あら板ら村おさとて宮司と思うう
□ 向きても候うそあく云ひき 井

◆ある宮司ら寄は者き河いらせむとおうぐる仲とあ五
見於ら板を付さう向れても候はおの云ひきとは
人寄の足恵をそれと祝ら云笑さそを付く
むい行ら笑あむと乳病見る友ちはさく
寄てる見信多はあるある人あむ

■ 葛籠届きて切わとく又 往

◆ある向れても候はむせひておうらあら死を告
る使とは五屋祝束ら板を付さうつら届し

切和く文は振て果遣寄は有お除て拓乗
まるをあるとしく状切和きここあく病の
板まあと見れても使も陪は候はむせて契ら
おうくまうるお板し

■ 除ことは森記あらくは伝を解す 及

◆ある つら届て寄法生の寓居とは五頁用を付さう
うとくと森記あり伝ら伝を伸すは為れせあく
記生の使まるは弱きつら和住を寝焚て
伝候板生独位の不自屋ある拓し

□ 泛ちく記まり試の寄舞 切

◆ある森記は伝を伸すは保記は吸ら仲とは
五幸号の用を付さうさえ西く記まの伐乃
寄すきとは西い寄愛のまあるは寄接男
のとく記て独ちを邑ら和は出るを伐ふの幸
云人い雑交ふると見て板く○再校 郷 陪さう
□ 何ちは呼ら合てらち笑 往

▲おなじ所にて大勢寄すく伊丹を『別』て若もあきれをかすり何の手ら峰合てしあ
笑ふかるを表のいとひあきを表の境界い又おの
こ笑ふ宝て彼出あるむさるんあてい和寺
と見やるも涙をり〜〈おの孝苦の情を考ま
折すり宝てもハかるおてい又かるく表友
もかるものかるく続申拾の用法に似ること有り

● 拾五ものく　サ中あく　井

▲おなじ海底うゆあふ伊丹を『汐干の拾を分すり
〈笑ふべき勿体のおれい活あ〜家い何るる身
我を笑ふと礼をつ伊丹を『山椒を文那く莊
相とも八人を又を求る歌又の情く拾あむ

□ 御風を腔次まる月深〜　ね

▲おなじ女中のと拾さ寺伊丹を『夏海を付
すり御風を腔次まる月深〜八条の仏会の
おつき風情を表のんときめく拾〜○因に三百

原氏四人又白九人拾象〜紀伊の国祝殿　及

□ 又るもかしき紀伊の国祝殿

▲おなじ御風を表れておを又あるく伊丹を『夏柿の
拾を分すり又るも長き紀伊の国祝殿と紀伊
又あの人の国祝殿をおるさる拾〜因和を云紀
拾名郡候中村也保ち紀拾家の井寺
板宝五の国祝殿あ〜り

■ 笑表のさ〜矢射てある花の張　井

▲おなじ又るも長き身先表の武徳を拾る伊丹を『
今の武備を分すり紀伊とる人いを表ようの焼
香の使表〜仏系の乃くとあ〜花の張を表表の
さ〜矢射てあるを又実やを世ると乃の天下九
〜ちく紀おいを芳ゑ弓矢の乃まかしき国
ふと先表のを比て〜ちひを表る方
の年情〜〈紀ゑ弓と外〜表表とる月をゑて
使表の拾四〜矢射を之和徳大八大矢教通

矢天下一ゟ因武用弁略寛文七の去紀の大ちか
家に若西使田吉田宮椿ちの五人ニ命し
て千射をおさしむ各九ア余の通矢あり
■ 蒜くらふ香ニおきさうりけり　深
◇あら花の張のさし矢ぢ下加茂の芝の然的ニ丈
立し足の人と付きり是ハ老とらふ向を浴本辺の老
僧の的足のく宮の芝ようてむと繕ひて弁当
完くおろし彼是ハ老まつ否とむとて宮ハもよきき
者而と芝の蒜捨て禁く喫の風景ニて来きれ
いえより釈氏の僧む悪喫香衣の被お払て
彼之と云ぬ捨られし薄ニ袈裟の破を老あり
けり◇是老ニいふお食とて足ハ了ニ居僧を
入せらり足袋の指入るニとし
■ 去の香あわくも眠るらし　千川 及
◇あら蒜放ちて浦家の辺を通りて作ト云々
夕飯時の指を付さり去の香あわくも眠る

あり上ハ日永ニ男なる接人の僕村をおろしモハヤ
掛下の宿も立てと人宿そて在眠偃す拈起○
らむハあ後ニ付すあぐト改えし
○ 紙衣の袴乃裾ニ居りて　れ
◇あら寄り眠を老人ト云々足袋を付さり△
老と足の立りし宮ハ日永ニ拈男し吹ト云々
□ちんさき手つく芽むまろくとモハあときき
情ニ変りてようくむ
□ 吐するうちも再く手を洗ひ　径
◇あら紙衣の袴彼て居出るを抓捨る作ト云々う
るさる指を付さり吐するうちも再々手を洗ト
ハ和尚の毎食忘きてう好めハいつも取入る
と立居ニ居寸袴を抓捨てハ手を洗ふハ
きれん毎の素三昧匿在るむ
■ 庭友祖ある夜庵を詣りけり　井
◇あら再々手を洗ふハ各小用仕廻て戻る作ト云々

森住友を分ち住友住あるを枝を泊りよ十人も寄る泊客のまこと記て涼むもあり又一人〳〵寄るもあるゑくの指〻

○ 木挾まれるゑう成し松の枝　加

◆ある日枝葉の中まで涼む体と云ふ所の肥おを付ゑう〳〵寄ゑ肥おいを分てもの門前おそ枝の詮句一寄ゑ住友住ある枝をつゑ住友一すんのおの寄る体と云ふ所不快ふんゑく奈良斤付て七八月で寄の姿をゑうむ

○ 秤まかる人〳〵乃奥　及

◆ある木挾入一度斤付体と云ふ所の義を分さり〳〵秤角力も寄て松の孫かし合体住と云る住也之寄住末松の枯葉ま挾入体夫の体と云ふ乃中てゑ姫の妻入もようむ

○ 乳手は成て夫乃痕もあさ　井

◆ある秤まゑる人〳〵の肥自慢する体と云ふ所を分ゑう住ゑまで夫のあるあさ六月中二人揺る老人〳〵寄ゑ痩男ゑ肥女ゑを求て所にも男捕ゑる撓力揺臼の家まゑる つき杵もかゑて七月をゑうミを分ゑ

○ 枕もセすまはしく寝入る月　孫

◆ある住ある働人と云ふ孫指を分ゑう〳〵働人と云ふ指の夫さゑ〳〵寄ゑ線を云て〳〵河と鼎体と云ふ所に京凡の皮て云ふ輝と七八病ゑある妻の徒お住居の背隠て〳〵敬ゑ事分かれとけゑゑる指を云てをゑうむ

○ ゑゑて陸子の張のうそさき　及

◆ある枕もセすきおゑるまくは寝ゑる体と云ふ皮膚の指を分ゑう〳〵ゑゑて陸子の張乃傷さき七小ゑゑうは独近ゑておゑつく寝ゑる指〳〵。乳鼎月字は面寸寄ゑ〳〵七お指ゑの体をセて所傷さき我刀一ゑ夫の分ゑ七八ゑもゑおゑゑる枝葉は

月頃くを以て去年を思ふ指あるむ
○ さきくるやうは去年なむ萩の葉子　ね
▲おのれ修子の陰の修家と呼ぶ寺の門に入て見る」又陰
の若衆を付たり△此場所をかれは傾城寺家にて又
乞ふ怪き古ちと入て見る」瓶程の以利ふ庵を乱して
トセハ大丈夫なる絵り老のり若て一枚を明
を指ま記信せむ
■
此布指入たる宮乃むかしなり　存
▲ある綱ろる夜の萩を見て夏を思ふ仲に入て見る」
夜なる人を付たり此指入たる宮のむかしけ
ユトハ廿夜花下文約さ夜帝さらの後の此組を訪ひ
乃ち次手入たる宮一入のひ「消ぬてうきぬ」を
灰に成ぬとも夜の烟は立もあれし此夜の
誘引よせて泣歌せるふおもふ太夫ねらずを
此を美夫すれは出させるふに此おの「花盛に噯入乱」
て夕暮なるけれて翔鶴隠るるを何れとも
なし人恋しくき中にも女むむの人の入るるやや
若しむむれきを見ゆりなで見たるき女良
む雅やすむむ暮の頃にと詠りせるふ「指之
△此おの花なくに中に萩も花とえて付たり是
おの夕暮なき女良むるなりトアス此附記信
なりむ依此むなりけり八俳諧之雅なるは「お毎
怪ラス室キん又「忍道モナキん本に老之り○大入る
宮さらに隠るをさ夜大ねに悩く哀なるともおらく
忍ひて人にも逢るふ事を憚るふをおらなれき
を押て交伏を云ふものり良旅寝之さる付
方は甚なてにぞかし又さ夜は中ねより帝に成縁
ふ人之寝るる大ねふ寺ね語をよく見よ
■
夜引さふる人乃足音　舟
▲あるむるなけれはに恨作る此むね指ト入て見る」又
旅を付たり夜引さふる人の足音ト廿夜三下 故云
さ夜中ねの時さが帝の二宮を留の袂に縮るる

を強大なる成るべし或おそき度の人考へぬ
契りて成るべし母宮弱き向のくと云
佐伯て立ちまつりぬ引連てさげは給り
帝の自の口姓と偽りて手を行ひ古歌
の横て口延生後強は母宮陸さも強られも
二宮の門一柄と成後口歌の余玉髮を切て
陸く井の乃は入のくさ衣やくと中移る強ひ向
むもでるのすきを正命中陸さむと母宮玉参を
たくせ姫玉世を肖ちも陸あることと後悔一
いそ伯厨そやと一扶要て入のを入乃宮も訪
あるもおうくに衣て几帳の度玉すり出むと
さ衣い光の張強ても捕すそこは特位るんを
仮て宮も考くのきむもでのくとふられ
あるくに衣玉徒るもうり位明るる指く
■ 毒ありと瓜一切もくたあり 切
◆あるの人考は衣行るい数の腰おを加る病人と足

玉足病人の指を行うり毒あるくと瓜一切もく
すあるのイヤトハ人自加。衣のまたあれい自分ヲ
人乃て毒乃するあるをこのうち全快むむ後く
口足玉和と看病人の必す指く
□ 斤風立てるる ヲち 及
◆あるの名おの瓜出るを用人保き客のせおい毒く
人すあ伴ト足玉来客の由を行うり斤風立てるる
ヲ玉ト俄るの度は腰を瓜一美客玉何ろ
と玉業出るる丈位玉下るを足て栄糧を
一口欠の人ヲと客立一後て実く指く△
あるは玉弛玉の内ある有は□結付ろうり
美い毒のんを掛るい程度玉房あむ
□ 板へきて踏如あさ庭乃内 井
◆あるの俄ヲ玉は陸位玉むとるうち時色く伴ト
足玉れ乱る指を行うり板へきて踏ふあき度
の内ヨクい業宮の茨ヲセむと度根ものき捨へき

並べる形ゑ来れい南並三とあそてられ
とを被き給次あれいれ行付横あく困るる板
て時られいやレく焼と又弄ゑ拾ゑ

■ 羽根乃ぬけるる事九　陳

▲あるヨシ板へきて古行二緒知ゑき屋の内白
と又ゑ二緒でい付ゑぬ用を付くり羽根のぬけ
る事きを九ゑ細ゑ横の邪広する彩を捕む
とするゑ左上く古板の年迹豆捕ゑるを古
板乃る拾ゑ墨の元る腐彩めと篭く拾ゑ墨の
ゑ捕ゑき河ある有ゑ□結付ゑ作くり

□ ぬくくと日称の事れぬ花墨　知

▲あるヨ羽技字老る接彩の妻ゑあく体ゑ人ゑ貫
横の拾を付くり咲くと日称の事れぬ花く
もりゑ花咲乱る乃陽の宮の杜を通る
旅人乃彩ゑ咲くら九ゑ八ゑ与宜脇れ
と方角ゑぬ知て日称も事れす板の時

主も合ゑあゑい日永きけ比の歌りと

○ 人俗を祖も結る法ゑ　及

▲あゑ花くりを脇る世山の体ゑ人ゑ貫むを法
つしと大寺くり合ゑ又ゑい拾ゑ宴ゑ墨ゑ日
南北向の老人ゑ人ゑ□会仏や墨ゑもあく夷
の宮ゑ日墨ゑ　ゑある拾を付くくさて代老
逝白多く集中ゑて大ゑ方ゑ比ゑの中秀く
る人ゑき有く宮ゑの墨ゑあくてゑ人ゑを崩序
一井出ゑの墨ゑき有ゑ知れむとゑ白さてゑ
部ゑの付白を員外ゑもゑ人ゑ有れくり世世の
集ゑ大方法邦の両三比を夜合て力くくの拾
ゑる出作れと墨く毎ゑ宴函の指拝墨きゑい
風間も拾を拾居も弁ゑくり宴ゑくさん地ゑる
墨て集作む人ゑ処功去の陵人を左のひ人き
ゑるゑくくー

あ世注終

	■	■	□	□	□	■	■	●	○	ム			
麦之毒害	一	卍	五	七	五	五	一	二	二		二	二	方卍
三吃方〜卍く	二	一	五	六	五		土	二	三		一	三	方五
〇二〇一	一	卍	卍	卍	十	一	卍		一	一	三	六	、
戒、、	卍	二	二	七	卍	三	十				三	二	方二
〇一〇一	五	二	二	七	三	八	一	三	一	三	二	一	方一
昂、、	卍	卍	卍	五	卍	卍	六	二	二	一	二	二	方二
〇一〇一	一	卍	九	五	七	五	二	卍	一		卍	一	方一
羊、、	一	二	一	一	卍	三	二	一	二			一	方二
初者一卍	卍	卍	卍	三	卍	卍	六	卍	二	一	三	二	方三
〇二	三	二	五	五	二	五	五	二	三	一	七		方六